



名大トピックス

No.133 平成16年6月30日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

名誉教授称号授与式・懇談会が開催される



特集

新名誉教授のことば(4 ~ 8 頁)

CONTENTS

・名誉教授称号授与式・懇談会が開催される.....	2	・平成16年度第1回全学教育科目担当教員FDを開催.....	21
・特集 新名誉教授のことば.....	4	・博物館が第5回中学生のためのネイチャーウォッチングを開催...	22
・21世紀 COE プログラム ORIUM が小柴昌俊講演会を開催...	9	・太陽地球環境研究所がシンポジウム「宇宙はおもしろい」を開催...	23
・第2回経営協議会及び第1回総長選考会議が開催される...	10	・附属図書館が2004年春季特別展を開催.....	24
キャンパスクローズアップ 野依記念学術交流館.....	12	・博物館が野外観察園の見学会を初めて開催.....	25
・名古屋大学医学部21世紀 COE プログラム「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成」がシンポジウム等を開催...	14	・博物館が第31回特別講演会を開催.....	25
・鮎京教授の「21世紀の『開発支援と法』研究」が平成16年度先端研究拠点事業に採用される.....	15	・農学国際教育協力研究センターが2004年度第1回オープンセミナーを開催.....	26
		・平成16年春の叙勲受章者決まる.....	26
		・理事・監事の紹介.....	27
		・新任部局長等の紹介.....	30
		・平成16年度名古屋大学公開講座.....	35
		[INFORMATION]	
		・イベント等の開催予定一覧.....	39
		・本学関係の新聞記事掲載一覧(平成16年4・5月分).....	40



・創造のプロセスを探る

岡田 猛.....

16

・羽多野技術職員が化学工学会研究功労賞を受賞.....	18
・エコトピア科学研究機構の看板上掲式が行われる.....	19
・今年度の大学見学が始まる.....	20



名誉教授称号授与式・懇談会が開催される

名誉教授称号授与式が、5月7日（金）豊田講堂第一会議室で行われました。

名誉教授の称号は、多年本学に勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった教授に授与するもので、今回は、昨年の29名を大幅に上回る52名（新制計850名）の先生方に授与されました。

式には、新名誉教授のうち39名の方々が出席し、平野総長から一人一人に、証書と記念品が授与されました。また、平野総長から、「新しく発足した国立大学法人名古屋大学においても、『質の高い優れた研究の創造と将来を担う人材の育成を行う』という基本理念は不変であり、このような考えのもとに、名古屋大学は、21世紀の学問の発展、科学技術の革新、人材の輩出、安全な高度医療などにおいて社会に貢献できる大学を構築するように努めてまいります。名誉教授の方々には、今後とも、本学の発展のためにご支援を賜りたく思っておりますので、健康にご留意いただきますとともに、ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。」とお祝いのご挨拶が述べられました。

続いて、名誉教授懇談会が約130名の参加を得て、シンポジオンホールで開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋及び今春の叙勲受章者、役員・部局長等の紹介に続いて、平野総長からのあいさつと、この一年の本学での動きなどについて報告があ

りました。その後、加藤延夫元総長の発声で乾杯が行われ、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。

この春、新たに名誉教授になられたのは、次の方々です（敬称略）。

前総長	松尾稔
大学院文学研究科	田島毓堂
大学院教育発達科学研究科	梶田正巳
大学院法学研究科	伊藤高義
大学院法学研究科	佐々木雄太
大学院法学研究科	平川宗信
大学院法学研究科	松井芳郎
大学院経済学研究科	牧戸孝郎
大学院理学研究科	垣谷俊昭
大学院理学研究科	手塚修文
大学院理学研究科	藤澤肇一
大学院理学研究科	宝谷紘一
大学院理学研究科	山下廣順
大学院医学系研究科	中島泉彦
大学院医学系研究科	水谷栄彦
大学院医学系研究科	村松喬忠
大学院工学研究科	板倉文彦
大学院工学研究科	一宮彪彦
大学院工学研究科	伊藤健兒

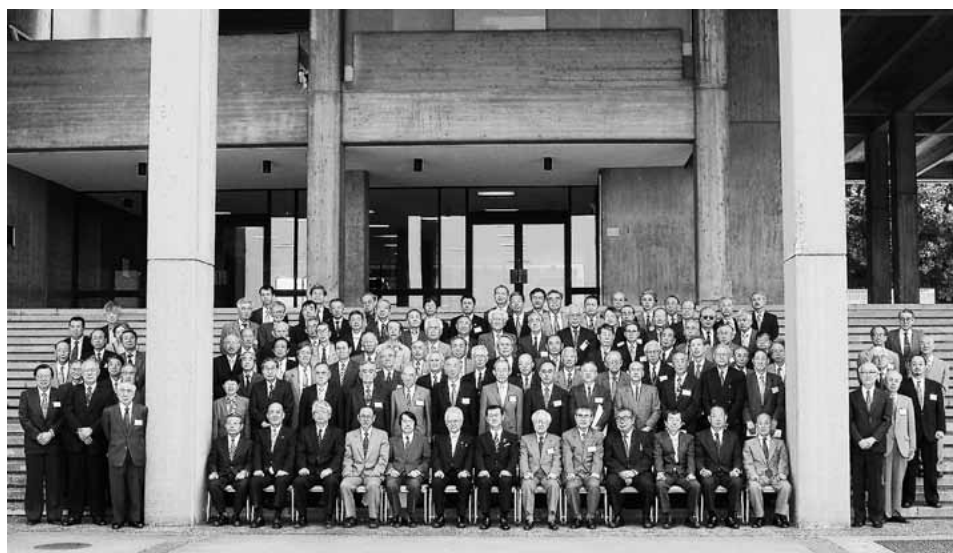


あいさつする平野総長

新名誉教授のことば

本誌特別号「平成15年度 定年退官教授のことば」(平成16年3月31日発行)に寄稿していただいた先生方のほかに、新たに名誉教授になられた次の先生方から、ことばをいただきましたので紹介します。

平 川 宗 信 (大学院法学研究科)
垣 谷 俊 昭 (大学院理学研究科)
大 曾 美恵子 (大学院国際言語文化研究科)
筧 一 彦 (大学院情報科学研究科)



名古屋大学を去るにあたって

平川 宗信



名古屋大学の独立行政法人化と法学研究科への法科大学院の設置を機に、定年まで4年を残して、32年9か月勤務した名古屋大学を辞職しました。

私が名古屋大学法学部へ助教授として着任したのは、1971年7月のことでした。当時、東山キャンパスの西側は緑が少なく、バス停の西方はすべて空き地で、その先に伊吹山が見えました。他方、四谷・山手通沿いには雑木林が残り、良い散歩道でした。今は、キャンパス西側も樹木が大きく成長して緑豊かになった一方で、四谷・山手通からは雑木林が消えてしまいました。その変わりように、時の流れを感じます。

私が名古屋大学へ着任したときは、まだ紛争の名残があり、法学部の玄関前には立看が立ち、職員控室にはヘルメットが置き去られていました。刑法改正問題で刑事法の長老教授の講義に学生が押しかけ、若輩の私の講演会でも机の上にヘルメットが並びました。しかし、やがて紛争の余波も静まり、比較的平穏な日々が続くようになりました。その頃は、授業や学内行政の負担も少なく、かなり落ち着いて研究に打ち込むことができました。私が仏教的主体性論に基づく刑法基礎理論と憲法的名誉毀損罪理論を形成したのも、この時期でした。その後の私の研究・教育は、この若いときの「貯金」が基礎になっています。今は、若手研究者も様々な仕事に追われ、「自転車操業」を強いられているようです。このような状態で今後の研究に必要な「貯金」ができるのか、非常に心配です。若い研究者に余裕を与えないと、次代の研究が枯渇すると思います。

比較的平穏な時期は10年足らずで終わり、1980年代の後半以後、「改革」の圧力が高まってきました。その最初が、「入試改革」でした。当時、私は評議員で、散々に振り回されました。しかし、あの「入試改革」

で入試が良くなったとは思えず、あの大騒ぎは何だったのかという思いがします。今にして思えば、「入試改革」は、「改革」のために文科省が国立大学に開けた「蟻の一穴」だったように思えます。文科省による大学の分断支配、文科省の思惑で大学が右往左往し、それで発生する問題の後始末は大学に押し付けられるという構図、文科省の意図を押し付けられながら大学の自主的な決定の形を取らされ、大学にその責任を押し付けられるという構図は、ここから始まったように思います。今回の独法化と法科大学院は、このような「改革」の一里塚なのでしょう。

国立大学の教職員が実感している通り、国立大学の独立行政法人化は、「独立」という言葉とは裏腹に、国立大学に対する文科省の支配の強化をもたらしています。その意味で、独立行政法人化の実態は、「従属」行政法人化です。私は、国立大学の独法化の本質は、国際競争が激化する中で国立大学の「日本株式会社研究開発部兼研修部」化ではないかと疑っています。これは、真実の探求という大学の本質に反します。法科大学院の本質も、これと同じではないでしょうか。また、その設置は拙速で、多くの矛盾・問題点を抱え、混乱が生じるのは必至とされます。しかも、国立大学は、人員増・施設増なしで従来の学部・大学院に加えて法科大学院をやらざるをえない状況で、無茶と言わざるを得ません。

このような流れに何もなしえなかったという思いと、このまま国立大学に居続けることへの抵抗感から、3月31日で名古屋大学を辞職しました。今後は、私学に身を置いて、引き続き、仏教思想を基礎に刑事法の研究・教育とその市民的实践を続けていく所存です。名古屋大学の本来の発展を心から祈念しつつ、見守らせていただきたいと思います。

グローバル化の意味するところ

垣谷俊昭



今春定年より一年早く名大を退官し、名城大に移ることになりましたが、名古屋大学には29年の長い間お世話になりました。大阪・京都での私自身の長い教育課程が終わり、名古屋大学が社会への実際の恩返しをする場になったわけです。このように、私は理学部という純粋な科学の教育と研究を主体とする場所に大部分の時間を費やしてきましたので、私にとって社会は大学を通してしか見えていない。私が名古屋大学に赴任した頃には、全国的に大学は産学協同反対で、人類普遍の学問文化探求の要であった(であろうとした)。しかし、世の中は次第に変わってきた。大学は企業・社会に役立つ人材養成機関、科学は新規産業を興す起爆剤としての役割が強く求められるようになってきた。そして、国立大学法人化を向かえ、それに応えるように動かざるを得なくなった。大学にとってこの間の変化は非常に大きいように見える。しかし、大学の外では、社会で言うグローバル化がもう10数年以上も前から進行し、ついにその大波が大学に押し寄せたということなのである。

社会のグローバル化とは何だろうか。私は社会・経済に通じているわけではないので、正確なところはわかりませんが、全地球規模での金融・流通機構の自由化を通じた産業・経済の国際化のようである。科学の世界では、もともと国際性をもっているので、科学は真にグローバルなものである。科学知識は人類共通の財産として、すべての科学者・市民に共有される。少なくとも少し前まではそう考えられてきた。したがって、科学のグローバルなものと産業・経済のグローバル化には非常に異なった側面がある。産業・経済にはもともと国家固有のものがある。それをグローバル化によって、国家間の壁を取り払った世界市場を作り上げ、そこで自由に競争しようじゃないかということのようだ。この国際化は自由化・民主化の理論を背景に

して、一見合理的に見える。しかし、国の成り立ち、地域の成り立ちには独自の歴史性があり、さらに独自の文化文明があるはずである。この点が科学の国際性と異なる。

社会のグローバル化は何故進行するのであろうか。それはインターネットの浸透、コンピュータの発展、新しい産業(バイオ、ナノテク、ロボット)の創生などによって新しい生産・流通・金融体系や新しい情報系が作り上げられてきたことによるのであろう。これはアメリカのリードによるところが大きい。われわれ科学者もインターネットやコンピュータの恩恵をずいぶん受けている。日本がこれまでのように経済大国を維持するためには、このグローバル化の波に乗らざるを得ないというのが現状であろう。文部科学省はそのような国家戦略の一環として、これまで2度にわたる科学技術基本法を策定し、日本の科学技術の底上げ、先端技術の開発援助に乗り出した。わが名古屋大学もその恩恵をずいぶん受けている。このような全体的流れの中で、国立大学法人化が進行している。

疑いもなく、社会のグローバル化に科学技術は中心的役割を果たすだろう。われわれ科学者がそれを好む・好まないにかかわらず、科学技術がグローバル化の推進役にはめこまれているのである。この流れは止められそうに無い。それは何故であろうか。よく言われているように、今後、地球人口が増え続け、食料不足がおこるとともに、地球環境がますます破壊され、汚染されていく。これが全地球規模でおこる。まさに新たなグローバル化現象である。これには冷静な科学的思考と創意・工夫がいる。さらに、弱者・強者にかかわらず科学の恩恵が受けられる社会の配慮がいる。科学と社会の関係はそれほどに緊密になってきた。それらは名古屋大学学術憲章にうたわれている。その実体化がためされる。

コンピュータ、そしてTA 制度

大 曾 美恵子



この度、名古屋大学から名誉教授の称号をいただけるとのこと、大変光栄に思います。またそれと同時に、名大での10年間に様々な形で支えてくださった元同僚の皆様、そして院生たちに心から感謝いたします。

名大の恵まれた環境で研究・教育に携わることができたことは幸せでした。そして、この間、かなりの数の院生が博士学位を取得し、日本語教育の分野で活躍しているのを見ると、感無量のものがあります。

研究面では、コンピュータを私なりに活用できるようになったことが大きかったと思います。1994年に名大に赴任するまでe-mailも使ったことがなかった私が、ウェブ教材作成、日本語コーパス利用の研究に携わることができたのは名大でコンピュータに精通した同僚に巡りあえたおかげです。現在、国際開発研究科に所属しておられる杉浦正利教授、滝沢直宏助教授、また情報メディア教育センターの外池俊幸教授、後藤明史助教授に心から感謝する次第です。

1995年に当時の言語文化部で「言語文化情報の電子化とインターネット」という研究が行われ、ホームページが開設されましたが、その当時、文系でホームページを持っている部局は少なく、拙い日本語会話教材を載せた私のホームページにもコメントが寄せられるほどでした。それから8年余り、この間のインターネットの普及はすさまじく、残念ながらウィルスの問題、迷惑メールの問題も多発するようになってしまいました。

しかし、インターネットから受けた恩恵は大きく、ホームページを通して我々の研究科の存在、私の研究分野を知った人々から頻りに問い合わせが入るようになり、米国、中国、スペイン、トルコ、チェコなど世界各国から学生、及び研究者を受け入れることがで

きました。

また1999年に講談社インターナショナルより出版された英和辞典、Kodansha's Basic English-Japanese Dictionaryの執筆にあたっては、共著の3人がそれぞれ米国プリンストン大学、東京の青山学院大学、名古屋大学に所属していたため、e-mailをフル活用して編集作業を行い、なんとかまとめることができました。

1996年から99年にかけては「日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化」で、2001年から04年にかけては「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」で科研費をいただき、優秀で誠実な分担者の協力を得て、興味深い研究をすることができました。まだ成果は十分にまとまっていないところもありますので、引き続き関連する研究を続けていきたいと思っています。日本語教育の現場でコンピュータをフルに活用するということまで至らなかったのは心残りですが、こちらの方も機会があれば挑戦したいと思います。

名大における教育の面では、TA制度を大いに活用させていただきました。院生にとって在学中から教育現場に立つことができるというのは大きなメリットです。ただ、アメリカ等に比べるとTAの活躍の場が限られているように思います。学部によってTAのあり方は違ってくるのでしょうか、語学教育においてはTAの更なる活用が考えられていいのではないかと考えています。

名大が研究のみならず、教育においても先駆的で、斬新なアイデアを取り入れ、益々発展していくことを願っております。

10年を振り返って

筧 一彦



1994年に教養部改組の流れを受けて発足した人間情報学研究科認知情報論講座に企業の研究所から赴任してきたので、丁度10年間名古屋大学にお世話になったこととなります。大学院を出てすぐに研究所に入り、主として基礎研究部門にいたこともあり大学でも研究所でも研究ということについてはそれほど変わりませんでした。必要な研究費や設備をどうするかについては、かなり違いがありました。名大（と呼ばせていただきます）に来て、まず音声知覚の研究を中心に展開しようと思ひ、そのアプローチとしてクロスリンギスティックス、言語発達、言語障害の3つを考えました。幸いに科学研究費、日仏共同研究、民間の研究助成を得ることができ、クロスリンギスティックな研究は、順調にスタートすることができました。後の2つのアプローチについては、他研究機関との協同研究、院生やポスドク研究員などの協力を得て進めましたが、当初の音声知覚の解明という方向とはやや異なる展開となりました。

認知科学は、それ自身学際的であり、かなり広い範囲の学問領域と関連します。名古屋大学のようなそれぞれの専門領域の研究者がそろっている環境は理想的で、多くの方々の専門的知識にお世話になりました。また、多彩な興味をいただいた院生さんが来てくれて一面では嬉しいことでしたが、その研究指導をし、必要な実験・研究環境を整える側の身にとっては大変なことがかなりありました。その結果、対象とする研究領域も広がり、広い意味でのコミュニケーション（人間-人間、人間-機械）とその環境について扱うようになりました。丁度その頃、旧制度のCOE（統合音響情報拠点）の企画に参加させてもらい、幸いにこれが採択されたので、コミュニケーションの大きな要因となる環境の認知・制御の研究に必要な設備・機器をと

のえて研究を進めることができました。このCOEは、21世紀COE（社会情報基盤のための音声映像の知的統合）に発展的に継承されています。名大の10年間はお蔭様で、研究費などの面での制約なしに比較的自由に研究活動をさせていただきましたが、これもひとえに名大という器と人材のなかに入ることができたからと思ひ感謝しています。

人間情報学研究科は、昨年情報科学研究科に変わりましたが、人間情報学研究科の時代においても数年に一回程度、かなりの組織改革を経てきました。企業の研究所においても数年に一度の割合で組織改革が行われるのが普通ですが、大学は教育組織でもあることなど組織改革に当たってかなり難しい面が大きいことを感じました。大学全体の改革として独立行政法人化が行われ、その際さまざまな議論が行われてきました。その中の一つに評価ということがあります。企業の研究所では、早くからこの問題が議論されてきましたが、評価が数量的な指標におちいりやすく、研究がその指標を強く意識したものになりバイアスを受けやすいなどの弊害も経験しています。また、評価は確かに平均値の向上にはつながりますが、真に革新的な研究を促進するものになるかなど難しい点を多く含んでいました。新しい試みの必要性はいうまでもありませんが、それに伴う作業量の増大なども問題でした。教育になるとその評価はもっと多角的で難しさが大きいように思います。このような難しさはあるものの、新しい制度の特徴を生かして名古屋大学が今後一層発展されることを願っています。

終わりにこのような時期にわがまを聞き入れていただき、早めに退職させていただいたことに感謝しますとともに、私自身も引き続き新しい職場で研究教育ということを考えて行きたいと思っています。



21世紀 COE プログラム ORIUM が小柴昌俊講演会を開催 - ニュートリノ天体物理学の誕生 -

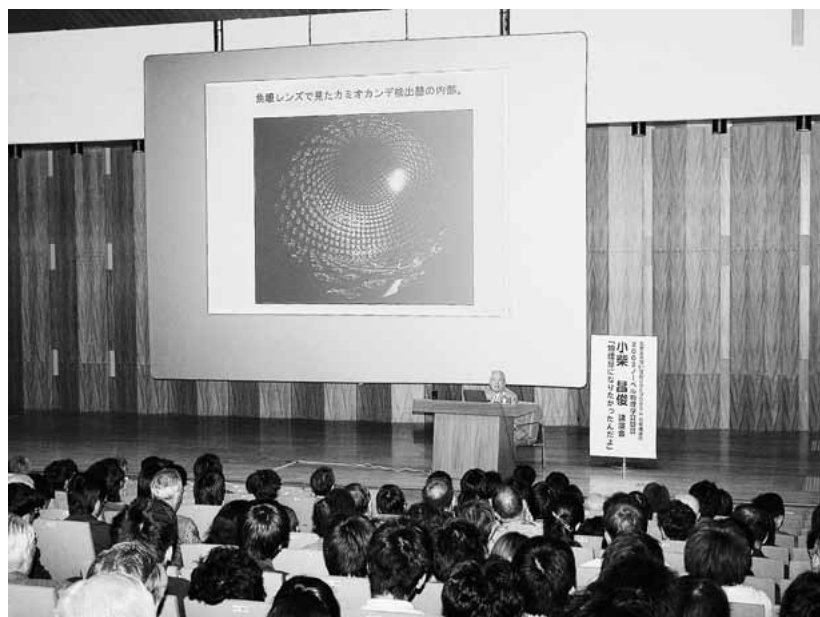
2002年のノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊東京大学名誉教授を招いて、4月23日（金）豊田講堂で21世紀 COE プログラム公開講演会が開催されました。

この講演会は、21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解釈」（拠点リーダー・福井康雄理学研究科教授）の情報発信の一環として企画され、同プログラムの柱の一つである「ニュートリノ天文学」の創始者である小柴先生に、基礎科学の魅力や必要性について語ってもらおうと開かれたもので、当日は、バスで参加した高校生を含め、学内外から1,600名を超える聴衆が集まり、会場の豊田講堂は立ち見が出るほどの盛況となりました。

小柴先生は、「ニュートリノ天体物理学の誕生」と題して、カミオカンデ（岐阜県神岡鉱山の地下1,000メートルの深さにある観測装置）の創始期の頃に始ま

り、色々と考えを巡らしながら実験を進めたこと、大マゼラン雲で起こった超新星爆発によって発生した素粒子「ニュートリノ」の観測に初めて成功した時の感動、さらに最近、スーパーカミオカンデ実験（カミオカンデの次期計画）において、ニュートリノに質量があることを初めて確認した成果などについて、情熱を込めて1時間以上にわたり講演されました。小柴先生は、「ニュートリノの観測はまだまだ若い段階です。皆さんのような若い人達が、さらに考えを巡らしてより質の高いデータを得るべく努力してほしい。日本の基礎科学を国民全体で応援してほしい。」と若者達への大きな期待を込めて語られました。

なお、講演会の前に、小柴先生ご夫妻は、豊田講堂応接室において、平野総長、物理学教室メンバーらと交えて歓談しました。



講演する小柴先生



第2回経営協議会及び 第1回総長選考会議が開催される

第2回経営協議会及び第1回総長選考会議が、5月29日（土）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

総長選考会議は、経営協議会の学外委員から選出された委員と教育研究評議会において選出された同数の委員で構成することになっており、本学では経営協議会の学外委員全員が総長選考会議委員となっていることから、経営協議会と同日に開催されたものです。

経営協議会では、初めに、平成16年度年度計画、平成16年度学内予算配分等について、担当理事から詳細な説明が行われ、委員からは大所高所からの貴重なご意見が多数寄せられました。また、本学の研究教育の取り組みについて、担当理事から資料をもとに説明が行われました。

続いて開催された総長選考会議では、初めに、議長の選出が行われ、柴田昌治委員が議長に選出されました。その後、4月1日の教育研究評議会及び4月3日の経営協議会です承された「国立大学法人名古屋大学総長選考会議規程（案）」、「国立大学法人名古屋大学総長の選考に関する暫定基準（案）」、「国立大学法人名古屋大学総長の解任に関する暫定基準（案）」について最終的な承認を得ました。

次いで、総長の選考及び解任の規程が暫定として定められているため、今後、総長選考会議で正式な基準等を定める必要があることから、検討のためのワーキンググループを設置することが提案され、その構成については9名の学内委員があたり、河野委員が主査となることが了承されました。



第2回経営協議会

第2回経営協議会議題

1. 平成16年度年度計画について
2. 名古屋大学職員退職手当規程の一部を改正する規程について
3. 平成16年度学内予算配分等について
4. 名古屋大学における教育研究の取組について

第1回総長選考会議議題

1. 議長の選出について
2. 国立大学法人名古屋大学総長選考会議規程等の制定について
3. 総長選考・解任基準等の検討について



第1回総長選考会議

総長選考会議委員

〔学外委員〕国立大学法人名古屋大学総長選考会議規程第3条第1項第2号委員（経営協議会選出委員）

加藤 鐵 夫	（独）農林漁業信用基金副理事長
兼松 顯	名城大学学長
郷 通 子	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部長
小林 秀 資	（財）長寿科学振興財団理事長
齋藤 明 彦	トヨタ自動車株式会社取締役副社長
榊原 定 征	東レ株式会社代表取締役社長
柴田 昌 治	日本ガイシ株式会社代表取締役会長
角田 牛 夫	中日新聞社常務取締役
丹羽 宇一郎	伊藤忠商事株式会社取締役社長

〔学内委員〕国立大学法人名古屋大学総長選考会議規程第3条第1項第1号委員（教育研究評議会選出委員）

伊藤 義 人	附属図書館長
大 峯 巖	大学院理学研究科長
神尾 美津雄	大学院文学研究科長
河野 正 憲	大学院法学研究科教授
佐分 晴 夫	大学院法学研究科長
澤木 宣 彦	大学院工学研究科長
杉浦 康 夫	大学院医学系研究科長
松田 幹	大学院生命農学研究科長
村上 隆	大学院教育発達科学研究科長



野依記念学術交流館



野依記念学術交流館は、前号で紹介された野依記念物質科学研究館と同様、野依良治本学特任教授（理化学研究所理事長）のノーベル化学賞受賞を記念して整備された施設です。

国内外の優れた研究者が集う国際シンポジウムや国際研究集会等を開催することができるカンファレンスホールや会議スペース、また、外国人招へい研究者の長期滞在用宿泊施設を備えています。

構造は、鉄骨造、地上4階・地下1階で、延べ床面積は、3,485㎡です。また、建物は、野依記念物質科学研究館の東面から連続するゆるやかなカーブを描くガラスの壁を延長してできた楕円形の平面形状をしており、その外壁は総ガラス張りになっています。

1階にある会議スペースでは、学内外の研究者や学生の情報発信の場として、学術情報データベースによる研究成果情報の受発信やNICE（名古屋大学情報ネットワーク）と接続して電子ジャーナル等を閲覧することができます。国際会議開催時には、分科会・ポスターセッションなど、多目的に利用できるよういくつかの大きさに変更可能な間仕切りを備えています。また、メインエントランスに隣接したホールには、カフェラウンジ（「BINAP - CaFe」）が設けられています。BINAP - CaFeは、野依特任教授の命名によるもので、同教授の研究に由来する



図書コーナー（1階）



カンファレンスホール（2階）

「BINAP（不斉触媒）」からとられたものです。林の中に配置された同館の1階からは2層吹き抜けのガラス越しに林の木立が見られ、気持ちの良い空間となっています。

約200人が収容できるカンファレンスホールは、ガラスの中に浮いたように見える2階部分の白い箱の中にあります。ホールは、講演にも円卓会議にも対応できるように、ステージの前の平らなスペースを広く取ってあります。

3・4階には、外国人招へい研究者の長期滞在を支援し、共同研究を円滑に進めるための安全かつ快適な居住環境を提供できる宿泊施設があり、単身用3戸、夫婦用5戸、家族用2戸の計10戸が設けられています。全ての宿泊室の玄関と居間は、中庭に面しており、さらに、居間の中庭に面する部分のサッシは全面開放し、住人同士の交流が活発に図られるような設計になっています。



中庭（3階・宿泊施設）



東山キャンパス



名古屋大学医学部21世紀 COE プログラム「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成」がシンポジウム等を開催

名古屋大学医学部21世紀 COE プログラム「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成」は、平成15年度に祖父江 元医学系研究科教授をリーダーとするプログラムが採択されたもので、神経変性疾患と悪性腫瘍の分子病態の解明、それに基づく治療法の開発等を目指しています。同拠点は、研究紹介やこれまでの研究成果の発表等のために、平成15年度に、シンポジウム及び若手研究発表会を下記のとおり開催しました。

第1回21世紀 COE 国内シンポジウム

同シンポジウムは、1月16日(金) 医学部医系研究棟1号館地下1階会議室において、同拠点のキックオフシンポジウムとして開催されました。当日は、学内外から約300名が参加し、立ち見が出るほどの盛況となりました。第1部では、COE 事業推進担当者による拠点及び各研究グループの紹介が行われました。また、第2部では、太田長寿医療研究センター病院長、高橋愛知県がんセンター研究所所長、加藤愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所所長が出席して、「近隣研究所との連携をめぐって」をテーマに、第3部では、「名古屋大学発の新規治療法をめぐって」をテーマに、ワークショップが開催されました。

第1回21世紀 COE 若手研究発表会

同発表会は、2月19日(木) 医学部医系研究棟1号館地下1階会議室において開催されました。この発表会は、同プログラムの大きな柱の一つである世界をリードする若手研究者の育成を図るために開催されたもので、「名古屋大

学発のブレイクスルーをめざして」をテーマに、若手研究者による7件の口演発表、32件のポスター発表が行われ、約250名の参加者による活発なディスカッションが繰り広げられました。特に、ポスター発表は、飲み物を片手にリラックスした雰囲気のもとで行われ、神経疾患・悪性腫瘍研究者が交流を深めるよい機会となりました。また、平成15年度に、特に優れた研究成果を残した2名の若手研究者にブレイクスルーリサーチアワードを贈呈し、その表彰及び受賞記念講演も行われました。

第1回21世紀 COE 国際シンポジウム

同シンポジウムは、3月25日(木) 26日(金)の両日、名古屋市内のホテルで開催されました。シンポジウムでは、「神経疾患、神経発生・分化の分子医学」をテーマに、海外から9名、国内から4名の招待講演者及び8名のCOE 事業推進担当者による最新の研究成果が発表されました。また、神経の発生と修復、神経系の機能分子、神経疾患の新規治療、アルツハイマー病の病態メカニズムの4つのセッションが設けられ、約250名の参加者による活発な議論と今後の国際的共同研究に向けての話し合いが行われました。海外の講演者からは、同プログラムの研究レベルや趣旨に対して高い評価が得られ、同拠点の国際化という点で順調なスタートを切ることができました。

今後もこのような会議を開催するとともに、神経疾患と悪性腫瘍の病態解明と、それに基づく分子標的治療の開発に努めていきます。



若手研究発表会ポスターセッション風景



国際シンポジウム講演者による記念撮影



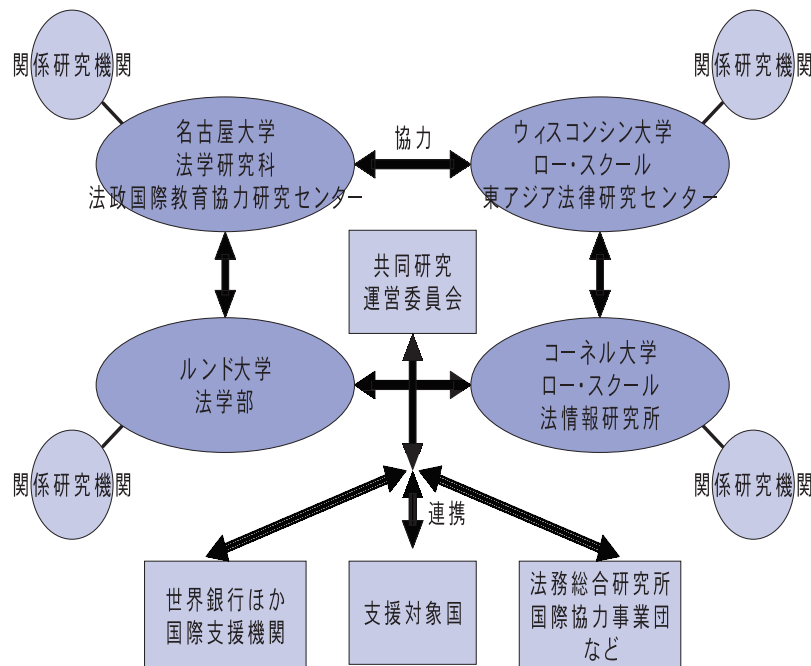
鮎京教授の「21世紀の『開発支援と法』研究」が 平成16年度先端研究拠点事業に採用される

法政国際教育協力研究センターの鮎京正訓教授をコーディネーターとする研究プロジェクト「21世紀の『開発支援と法』研究」が、平成16年度先端研究拠点事業に採用されました。

先端研究拠点事業とは、(独)日本学術振興会が我が国と複数の学術先進諸国15か国の大学等学術研究機関との間で、先端分野における国際的な協力体制構築促進を目的として、平成15年度から開始した新しい事業です。平成16年度は、79件の申請があり、そのうち13件が採用候補課題としてヒアリングを受け、最終的に7件が採用されました。また、同研究課題の「21世紀の『開発支援と法』研究」は、採用された7件のうち唯一の社会科学系分野でもあります。

発展途上国に対する近年の開発支援は、法改革を通して、支援対象国の人々の権利の保護、適切な社会運

営、さらに、経済発展を図るというアプローチが取られています。このプロジェクトは、本学法政国際教育協力研究センター、コーネル大学ロー・スクール法情報研究所、ウィスコンシン大学ロー・スクール東アジア法律研究センター、スウェーデンのルンド大学法学部を研究のハブとして位置付け、国際的な法整備支援研究ネットワークを構築し、法改革を核とする開発支援をより有効にするための総合的な理論（法支援学）の構築を目指しています。また、法改革は、政治・経済・文化・社会の分析、法制度マネジメント手法の確立、改革のための情報の国際的共有を中核とする総合的研究を要請するため、この研究協力体制は、法支援学を支える専門横断的で国際的な専門家の協力体制の構築につながると期待されています。



組織図



創造のプロセスを探る

岡田 猛

ある時、熟達した水墨画家がお寺の襖絵を制作する様子を、泊まり込みで観察する機会がありました。その画家は、はじめはまるで神業のようにスムーズに制作を進めて行きましたが、途中で自分の思い描いていた絵にならなくて、呻吟しながら試行錯誤を始めました。一人の画家が塗炭の苦しみを味わいながら筆を取る様子が、痛々しいくらいに伝わってきました。私はまさに作品の「産みの苦しみに」、立ち会うことができたのです。「彼はそのとき何を考え、どのようにイメージを生み出し、それを絵にしていっていったのだろうか?」、それが、私が感じた素朴な疑問でした。この経験は、認知心理学者として芸術創作プロセスの研究を始める、一つのきっかけとなりました。

芸術家の実際の創作プロセスを詳細に分析した認知心理学的研究は、これまでほとんど行われていません。そこで我々は、伝統的な絵画から現代アートまで様々な分野の芸術家に協力を求め、実際の創作活動の観察やインタビューなどを行うことにしました。その際、豊富なデータを収集するために、マルチメソッドというアプローチを採用しています。具体的には、アトリ

工などでの現場観察（創作プロセスのビデオ記録等）、創作に関するインタビュー、一定の条件下で作品を作ってもらう現場実験など、いくつもの方法を組み合わせて研究を行います。そうすることで、芸術の創造性に関する本質的に重要な情報を収集することができ、そこから新たな仮説を導き出すことが可能となります。これらの仮説は統制された条件の下での実験室実験により検証され、現実の活動に根ざした芸術創作プロセスの解明につながっていきます。創造の現場での観察や心理学実験の認知プロセスデータから、本質的な部分を抜き出し研究の形にしていくためには、経験に基づく知識や技術と大量の時間が必要です。このような泥臭い研究スタイルは、研究論文を量産するためにはあまり効率的ではないかもしれませんが、「創造」という高度で複雑な認知活動について、リアリティの高い知見を得るためには、必要不可欠なステップであると私は考えています。

具体的な研究例を紹介しましょう。水墨画家の創作活動の研究では、マルチメソッドを用いていくつかの興味深い研究仮説を得ました。その一つに、「創作場



1. 大きな木を描いている

2. 木の側に人物が添えられる

3. ほぼ構図ができあがる

図1 山水画の描画プロセス

面でのイメージの生成に身体活動が重要な役割を担っている」という仮説が挙げられます。現場観察を行っているときに、我々は、画家が一筆入れようとするたびに手を空中で細かく動かす「空書」を行っていることに気がつきました。しかし、観察だけではその役割について詳しく調べることができません。そこで現場実験を行い、いつ、どこで空書が行われるのかを詳しく検討したところ、空書には、1) 描き始める場所を決める「ポジショニング」、2) 絵を描くときの身体感覚を思い出す「リハーサル」、3) 次に描く部分のイメージを生成する「イメージ生成」といった機能があるという可能性が浮かび上がってきました。

現在は、さらに現代芸術家の創作プロセスについても、現場研究を進めています。それらの現場研究から生成された仮説を検証するために、心理学実験も行っています。なかでも、「創造に及ぼす模倣の効果」の研究では、興味深い結果が得られつつあります。

さて、これまで芸術の創造性の話をしてきましたが、もう一つの代表的な創造領域である科学の創造性はどうでしょうか？一般には、芸術家の活動と科学者の活動は、全く異なると考えられています。しかし、自然の仕組みや数学の定理に美しさを見いだす科学者や、

ピアノ演奏や写真などの芸術的才能を併せ持った科学者もたくさんいます。両者の間は、実は一般に考えられているほど離れてはいないのかもしれませんが。科学と芸術の両方の創造性を説明する、包括的な認知モデルを構築するためには、芸術家の創作プロセスと科学者の研究プロセスを実証的に調べて、比較することが不可欠です。

実際、科学の創造プロセスに関しても、我々は「科学的思考プロセス」、「共同研究を通しての科学的発見プロセス」、「学問領域における妥当性境界の構築プロセス」など、個人のレベルから、研究チーム、学問コミュニティのレベルにわたって、研究プロジェクトを進めてきました。今後も、マルチメソッドを用いて、マルチレベル（個人、チーム、コミュニティ）の視点から実証的データを積み重ねることにより、芸術と科学の創造性の統合的モデルの構築に向けて、研究を進めていきたいと思っています。

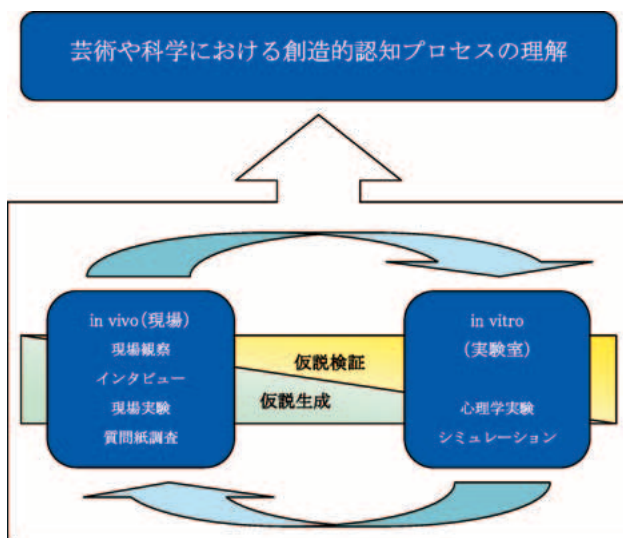


図2 創造的認知プロセスの研究枠組み

プロフィール

おかだ たけし

平成6年カーネギーメロン大学大学院修了、Ph.D. in Psychology。ピッツバーグ大学学習開発研究センター博士研究員を経て、平成7年より名古屋大学教育学部助教授。平成12年より名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授。平成15年より高等研究院流動教員を兼任。





羽多野技術職員が化学工学会研究功労賞を受賞

羽多野工学部・工学研究科前任専門技術職員（全学技術センター）が、化学工学会研究功労賞を受賞し、4月3日（土）に大阪府立大学で開催された化学工学会第69年会総会において、賞状と記念盾を授与されました。

今回の羽多野技術職員の受賞理由は、粉体物性の測定手法や測定装置などの考案・製作によって、化学工学的研究に貢献したことに対し、化学工学会から同賞が授与されたものであり、本学においては初めてのことです。

同技術職員は、昭和42年から37年間にわたり、主として粉体に関わる業務に従事してきました。特に、粉体層の引張り破断強度に関する研究においては、独自の技術により、非常に困難とされていた低空隙率域における強度測定を可能にする装置の開発、特殊雰囲気

下や高真空下における引張り強度の測定装置及び一個粒子の付着力測定装置の開発などを手がけるとともに、これらの装置を駆使して貴重なデータの取得・整理を行い、学会等に発表してきました。また、粉体の粒度分布測定法の開発においては、遠心沈降差圧法による全く新しい測定装置を完成させ、サブミクロン域における粒度分布の直接重量測定を可能にしました。最近では、造粒に関する分野において、微粉体の付着力を利用したバイングレス造粒技術を開発し、化学工学会や関連学会等において発表を行い、論文も著しています。同氏は、こうした粉体に関わる研究の最前線に密着した測定手法や斬新な測定装置の開発などを通して、この分野の発展に貢献しており、これらの成果が高く評価されています。



化学工学会総会で賞を受ける羽多野前任専門技術職員



エコトピア科学研究機構の看板上掲式が行われる

本学の6センター・施設等を再編・統合して、平成16年4月に設置されたエコトピア科学研究機構の看板上掲式が、5月26日（水）、快晴のもと行われました。

上掲式には、平野総長、渡橋事務局長、澤木工学研究科長をはじめ、学内関係者約60名の参加があり、同研究機構を代表して、松井機構長から、機構設立に携わった関係者へのお礼と機構の現状及び役割についての報告、さらに、総合大学としての研究ポテンシャルを内外に示すため、同研究機構を部局横断型開放研究拠点と位置付け、努力する旨の表明がありました。続いて、平野総長から、本学が進めている幅広い分野の力のインテグレーションによって、同研究機構が、「人」を基軸とした新領域の創成と社会に貢献できる国際的研究拠点となるように全学的に支援したいとあいさつ

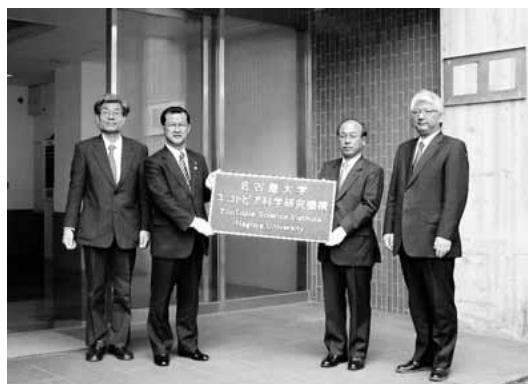
がありました。その後、平野総長、渡橋事務局長、澤木工学研究科長及び松井機構長による同研究機構の看板が共同教育研究施設2号館玄関に上掲されました。

同研究機構は、現在、学内6か所に分散されており、看板は、多くの教員の研究室と事務室がある共同教育研究施設2号館の玄関に上掲されましたが、今後、研究機構固有の建物の新設を文部科学省へ要求することになっています。

同研究機構の設置により、「もの、エネルギー、情報の循環・再生と人間との調和」を切り口にした持続可能な21世紀型社会（エコトピア）実現に向けての学際融合研究が、人文・社会科学系と自然科学系の部局教員の協力や産学官連携により、強力に推進されると期待されています。



あいさつする松井エコトピア科学研究機構長（中央）



看板を上掲する（左から）澤木工学研究科長、平野総長、松井エコトピア科学研究機構長、渡橋事務局長



今年度の大学見学が始まる

総務広報課では、例年8月に実施されている大学説明会とは別に、高校生や中学生、保護者等の大学見学を随時受け付けていますが、4月16日（金）、今年度初の大学見学として、麗澤瑞浪高等学校の先生、生徒総勢35名が本学を訪れました。

一行は、最初に、農学部で木村真人教授から教育・研究内容の説明を受けた後、博物館と広報プラザを見学しました。また、同校を卒業した本学の学部学生が一行のもとを訪れ、後輩にエールを送りました。

大学見学は、普段のキャンパスの雰囲気を感じてもらうことで、本学でのキャンパスライフに夢と希望を持っていただき、本学を目指すきっかけとなることを目的として、主に、本学紹介ビデオの上映による概要紹介、広報プラザ・博物館・附属図書館の見学、キャンパスの自由散策等を実施しています。また、特に希望される場合には、学部等の協力のもと、説明会や施設見学も行っています。なお、昨年度の来訪者数は、28校1,447名でした。



博物館で西田佐知子助手から説明を受ける高校生



附属図書館職員から説明を受ける高校生

平成15年度大学見学受入状況

訪問日	学校名	人数
4月18日	麗澤瑞浪高等学校（2年生）	80名
4月24日	磐田高等学校（2年生）	43名
5月6日	山梨学院大学附属高等学校（2年生）	110名
5月8日	浜松湖南高等学校（3年生）	39名
5月13日	中京高等学校（2年生）	70名
5月14日	美濃加茂高等学校（3年生）	62名
6月27日	時習館高等学校（PTA）	73名
7月2日	関高等学校（1年生）	359名
7月4日	高崎高等学校（2年生）	36名
8月5日	大垣東高等学校（PTA）	42名
9月5日	津西高等学校（1年生）	90名
9月11日	日本語学校 I.C.nagoya	15名
9月24日	屋代高等学校（PTA）	50名
9月24日	春日丘高等学校（2年生）	14名
9月30日	豊橋市立南部中学校（3年生）	3名
10月1日	豊明高等学校（PTA）	32名
10月9日	虎姫高等学校（PTA）	52名
10月14日	羽水高等学校（2年生）	83名
10月15日	水口東高等学校（2年生）	50名
10月16日	虎姫高等学校（3年生）	8名
10月16日	稲沢市立千代田中学校（3年生）	10名
10月17日	彦根東高等学校（PTA）	60名
10月23日	川越高等学校（PTA）	40名
10月31日	成章高等学校（PTA）	3名
10月31日	名古屋市立川名中学校（1年生）	3名
11月13日	知多市立八幡中学校（2年生）	3名
12月10日	小牧市立小牧中学校（2年生）	8名
3月17日	美浜町立野間中学校（2年生）	9名

受け入れ学校数 28校 人数 1,447名

*写真は、5月11日の山梨学院大学附属高等学校の学校見学



平成16年度第1回全学教育科目担当教員FDを開催

教養教育院は、4月5日(月) 全学教育棟3C講義室において、平成16年度第1回全学教育科目担当教員FDを開催しました。

このFDは、昨年度から始まった新カリキュラム「全学教育科目」の教育目標を各担当教員が共有することを目的として、非常勤講師を含む平成16年度全学教育科目担当教員全員を対象に開催されたもので、今回は、全体会及び科目別分科会を実施し、過去最高の361名が参加しました。

全体会では、速水教養教育院登録教員群管理専門委員会委員長の司会進行のもと、初めに、若尾教養教育院長(理事・副総長)からFDの趣旨について説明があった後、平野総長が、「名古屋大学の教養教育の目標」をテーマに、大学の使命、教養教育の目標やFDへの期待等について講演を行いました。

続いて、小栗評価専門委員会委員長から平成15年度授業アンケート結果の概要について報告があり、次いで、篠田教養教育院教務委員会委員長から平成16年度授業実施について説明がありました。また、昨年度ま



講演する平野総長

で本学高等教育研究センター教授で、総長補佐であった池田輝政名城大学教授が、「大学にとってのFDの意味」と題する講演を行いました。

全体会終了後、基礎セミナー、言語文化、健康・スポーツ科学、文系基礎、物理学、化学、生物学、地球科学、数理科学、情報科学、全学・文系・理系教養の各科目に分かれて科目別分科会が開催され、各科目主査等から各科目の教育目標について説明があった後、有志数名から授業実践プランの報告があり、それをもとに参加者の間で活発な意見交換が行われました。

参加者からは、教養教育、新カリキュラムの構造及び他の教員の授業の進め方を聞くことができ参考になった等の意見が多く寄せられ、大変有意義なものとなりました。



FDの趣旨について説明する若尾教養教育院長



博物館が第5回中学生のための ネイチャーウォッチングを開催

博物館は、5月8日(土)、名古屋市科学館との共催で、第5回「中学生のためのネイチャーウォッチング」を開催しました。

ネイチャーウォッチングは、博物館が創設されて以来、毎年開催されているもので、今回は、文部科学省の地域貢献特別支援事業の一環として実施されました。この企画は、例年人気が高いことから、定員を従来のほぼ倍にあたる約40名としました。当日は、天気もよく大潮で、ネイチャーウォッチングには最適な日となり、応募者42名からキャンセル分を除く36名(うち、本学教育学部附属中学校生7名)が、大型バスで、博物館スタッフ5名と特別参加の附属中学・高校教諭1名とともに、知多半島内海の磯ヶ浦海岸へ出発しました。

午前中は、足立博物館長の指導で、化石探しに挑戦しました。ゴーグルをつけ、海辺の石をハンマーでたたくと、貝、ウニ、クモヒトデなどのきれいな化石が見つかり、中学生はみな大喜びでした。また、中学生と博物館スタッフが、「これは化石?」、「似ているけど、石の破片だね」、「この紫色のところは何?」、「鉄やマ



岩場で磯の生物を観察する中学生

ンガンが集まったところだよ」などとやりとりする光景が至る所で見られました。

昼食後は、西川輝昭教授の引率で、岩場に出て磯の生物を観察しました。褐色のワカメ、触ると紫色のインクを出す大きなアメフラシと黄色いそうめんのようなその卵、最近では珍しくなったウミフクロウ、エビの仲間とは思えないカメノテやフジツボ、真っ黒なマナモコ、小さなムラサキウニやバフンウニをはじめ、60種ほどの生物を見つけました。中学生達は生き物を手に取ったり、臭いをかいだりしながら、時間をかけてじっくりと観察していました。

アンケートには、「カニにはさまれたけど、楽しかった。また来たい」、「一度やってみたかった化石採りができてよかった。見つかった時はうれしかった」、「来年はサメの歯の化石を見つけたいです」、「アメフラシの感触が気持ちよかった。カニとわかれるのがつらかった」、「あんなにイソギンチャクがいるとは思わなかった」、「いろいろな海の生物をみたり、さわったりできてよかった」など、感性豊かな感想が書かれていました。



化石探しをする中学生



太陽地球環境研究所がシンポジウム 「宇宙はおもしろい」を開催

太陽地球環境研究所は、5月30日（日）豊川市と共催で、「宇宙はおもしろい」と題するシンポジウムを豊川市にあるプラネタリウム「ジオスペース館」で開催しました。

このシンポジウムは、大人から子供までの一般市民を対象に、我が国で行われている最先端の宇宙研究・開発を通じて、宇宙の魅力や地球環境の重要性を広く一般市民に理解してもらうことを目的に開催されています。

シンポジウムでは、国立天文台助教授の渡部潤一氏、宇宙航空研究開発機構（JAXA）研究員の油井由香利氏、小島正宜同研究所教授の3名による特別講演が行われました。

最初に、小島教授が、「太陽によって変わる宇宙の天気」というテーマで、地球及びその周辺の宇宙環境が太陽によって大きな影響を受けていることを分かりやすく講演しました。太陽と地球の関わりを解明することは同研究所の重要な使命ですが、シンポジウムの冒頭で、太陽と地球の関わりについて紹介することで、続く2つの講演の橋渡しとなりました。

続いて、渡部氏が、「宇宙の魅力 - 星空の観測から」というテーマで、すばる望遠鏡などで撮影された美しい画像を見せながら、星の一生や最新の彗星観測結果について紹介しました。また、渡部氏は、星空を眺めて宇宙のことに想いを馳せる「星空浴」の実践を客席の聴衆に呼びかけました。

最後に、油井氏が、「我が国に宇宙探査計画」をテーマに、我が国において進行中あるいは計画中の科学衛星・実用衛星の計画について、包括的に説明しました。参加者は、おもしろそうな衛星計画がたくさんあることを知り、将来の宇宙探査計画への期待に胸を膨らま

せていました。

講演終了後の質疑応答では、予定時間を大幅にオーバーしてしまうほど、参加者から次々に質問が寄せられ、参加者の宇宙に対する関心の高さを伺わせました。

宇宙については、誰もが興味を感じていながら、一般市民が最前線のホットな話題に接する機会はなかなかありません。同シンポジウムは、宇宙に対する好奇心に応えるとともに、子供達も含めた一般市民に対して宇宙への興味を育むいい機会となりました。

同研究所は、ジオスペース館において、豊川市と協力しながら様々な催しを実施し、教育・研究はもとより地域と密着して、社会貢献に努めてきました。今後も地域連携の拠点となっているジオスペース館でこうした取り組みを行っていくつもりです。



シンポジウムの様子



附属図書館が2004年春季特別展を開催

附属図書館は、3月23日（火）から4月21日（水）まで、同館研究開発室と共催で、2004年春季名古屋大学附属図書館特別展「和歌（うた）の書物 新古今和歌集とその周辺」を開催しました。

これは、後藤重郎^{しげお}名誉教授（文学部）から新古今和歌集に関する資料が多数寄贈されたのを機に企画されたもので、これらの資料の紹介とともに、本学が所蔵する「神宮皇学館文庫」等の中から、関係する歌論書の展示も併せて行われました。

開催期間（土曜、日曜を含め29日間）が、春休みから新年度の開始時期だったにもかかわらず、本学の教職員、大学院学生及び学部学生のほか、一般市民も含め、約700名もの入場者があり、非常に好評でした。とりわけ、和歌を実作して短冊にしたため、桜の木（造花）にこよりで括り付けて情緒を愉しむという趣向に

は、50首近い和歌が寄せられ、桜の花と色紙の短冊とが、新古今の和歌の世界に一層の華やかさを添えていました。

また、展示会に関連して、4月17日（土）に、「新古今和歌集とその時代」と題したギャラリートーク（講演会）が開催され、大井田晴彦文学研究科助教授による「今回の展示書物について」、田中喜美春元文学研究科教授による「新古今集とその時代」及び島田修三愛知淑徳大学教授（歌人）による「新古今和歌集と前衛短歌」と題する講演が行われました。当日は、教職員、学生及び一般市民、計160名を越える参加があり、当初予定していた会場のほかに、サテライト会場を用意してインターネットでのライブ中継も行われました。また、講演会終了後には、多くの参加者が展示室を訪れ、熱心に展示品を鑑賞していました。



多くの人を訪れ、賑わう展示会



ギャラリートークの様子



博物館が野外観察園の見学会を初めて開催

博物館は、5月8日(土)、野外観察園の見学会を初めて開催しました。

この野外観察園は、昭和38年頃に旧教養部の生物学実験圃場として造られた、約4,000㎡の緑地で、現在、温室を含め500種に及ぶ植物が生息しています。近年は、情報文化学部・人間情報学研究科の実験圃場として使用されていましたが、学内だけでなく、小・中・高生や市民を視野に入れた幅広い教育に活用するため、平成15年度より博物館が管理運営を行っています。また、観察園の隣に、セミナーハウスも建てられるなど充実が図られています。

当日は、汗ばむほどの陽気のなか、本学の教員、学生、親子連れ、一般市民等22名が、キショウブ、センダン、キソケイ(ジャズミンの仲間)、ピラカンサなどの花が咲き始めた観察園を見学しました。

見学会では、まず、博物館インフォメーションシリーズ「名古屋大学野外観察園の生物」という冊子を手にし、観察園の歴史や概略、ラクウショウやアベマキなどの植物の自然史や人の暮らしとの関わりなどを教わりながら園内の植物を觀賞しました。その後、参加者は、観察園を歩き回り、昔から知っている木や覚えたばかりの木に、次々と名札を付け、最終的には、80枚ほどの名札を付けました。なかには、親子で一所懸命、目当ての木を探すほほえましい光景も見られました。

ほとんどの見学者が、東山キャンパスの一角に、こんなに多くの植物が生えている場所があることに驚いた様子で、「木の名前が覚えられてよかった」、「ぜひ違う季節にも見学会を開いてほしい」という感想が出されました。



野外観察園を見学する参加者



博物館が第31回特別講演会を開催

博物館は、第7回特別展「名古屋大学の研究・教育を支えた匠の技」に関連して、4月22日(木)に、第31回特別講演会を開催し、増田忠志全学技術センター技術課長による「名古屋大学「匠」の技 - その成功と失敗 - 」と題する講演が行われました。

講演会で、増田氏は、本学でこれまでに開発・作成されてきた技術や実験装置などの紹介と併せて、「技術とは何か」、「大学における技術開発と企業での技術開発の違い」などについて話されました。特に、技術開発にはさまざまな失敗経験の積み重ねが重要であり、成功した技術の裏には必ず幾多もの失敗が存在することをいろいろな事例を用いて分かりやすく解説されました。一方で、これらの大学に蓄積された知識や技を継承することが難しくなってきたこと、技術の継承をも含めた次世代教育が必要であることについても述べられました。

当日は、学内外から約80名の参加があり、熱心に聴講するとともに、大学での技術開発と研究のつながり、技術や知識をどのように継承していったらよいのかなどの質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。また、講演会終了後も、講演会場に並べられた金属試料などを熱心に見る参加者の姿が見られました。



講演する増田全学技術センター技術課長



農学国際教育協力研究センターが 2004年度第1回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、5月18日（火）「開発プロジェクト実施で見落とされがちなポイント - 応用されない理論」と題して、2004年度第1回オープンセミナーを開催しました。

講師は、現在 JICA 専門家として、セネガル総合村落林業開発計画チーフアドバイザーを務める野田直人氏で、約1時間半にわたり、経済学など他分野で開発された理論の応用が開発事業においても有効であるという主旨の話をしました。例えば、限界収益逓減法則を無視した計画であるかどうかを確認するということなどで国際開発事業のデザインの問題点が明らかになるし、未来を予測することが難しいという前提条件が同じであれば、プロジェクト運営も株の売買と同じようにリスクを最小限にするために多様な活動内容を取り入れることが有効であるなど、他分野で頻繁に使われている理論の開発事業への応用方法が紹介されました。

長年にわたる世界各地での社会林業プロジェクトの実施経験のほかに、国際開発メーリングリストを主宰し、参加型開発に関係する著書や翻訳を手がけるなど、開発エキスパートを目指す若者だけではなく、教育関係者にも様々な影響を与えている野田氏の開発論への実践的手法の提案に、高校生2名や一般社会人など計23名の参加者から多くの質問が出され、活発な質疑応答が行われました。



講演する野田氏



平成16年春の叙勲受章者決まる - 本学関係者7名が喜びの受章 -

平成16年春の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

- | | | |
|-------|------------|-----------------------------------------------------|
| 瑞宝重光章 | 丸勢 進 (78) | 名誉教授 (工学部)
元工学部長
元名城大学長 |
| 瑞宝中綬章 | 田浦 武雄 (81) | 名誉教授 (教育学部)
元教育学部長
元名古屋柳城短期大学長
元愛知学院大学教養部長 |
| 瑞宝中綬章 | 田中 元治 (78) | 名誉教授 (理学部)
元理学部長 |
| 瑞宝中綬章 | 福村 晃夫 (79) | 名誉教授 (工学部)
元大型計算機センター長
元中京大学教授 |
| 瑞宝中綬章 | 中 重治 (79) | 名誉教授 (工学部)
元金沢工業大学教授 |
| 瑞宝双光章 | 加藤 久雄 (77) | 元工学部事務部長
元椋山女学園大学学生部教務課長 |
| 瑞宝単光章 | 白井 忠夫 (63) | 元文部科学技官
自動車運転手 |

理事・監事の紹介



理事（総務関係担当）・副総長

山下 廣順

（やました こうじゅん）

昭和15年12月14日生

プロフィール

学 位：理学博士（名古屋大学）

専門分野：宇宙物理学

略歴

- 昭和43年 4月 名古屋大学助手（理学部）
- 昭和54年 8月 大阪大学助教授（理学部）
- 平成 2年 4月 宇宙科学研究所教授（共通基礎研究系）
- 平成 4年10月 名古屋大学教授（理学部）
- 平成 8年 4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）
- 平成12年 1月 名古屋大学大学院理学研究科長（～ H14.12.31）
- 平成16年 4月 名古屋大学理事（総務関係担当）・副総長（～ H18.3.31）



理事（病院・環境安全関係担当）・副総長

中島 泉

（なかしま いずみ）

昭和15年 4月24日生

プロフィール

学 位：医学博士（名古屋大学）

専門分野：免疫学

略歴

- 昭和45年 4月 名古屋大学助手（医学部）
- 昭和50年 1月 名古屋大学助教授（医学部）
- 昭和56年 5月 名古屋大学教授（医学部）
- 平成 9年 4月 名古屋大学医学部長（～ H11.3.31）
- 平成12年 4月 名古屋大学教授（大学院医学研究科）
- 平成14年 4月 名古屋大学教授（大学院医学系研究科）
- 平成14年10月 名古屋大学総長特別補佐（～ H15.3.31）
- 平成15年 4月 名古屋大学副総長（～ H16.3.31）
- 平成16年 4月 名古屋大学理事（病院・環境安全関係担当）・副総長（～ H18.3.31）



理事（人事・労務関係担当）・副総長

森 英樹

（もり ひでき）

昭和17年 4月23日生

プロフィール

学 位：法学修士（名古屋大学）

専門分野：憲法

略歴

- 昭和43年 4月 名古屋大学助手（法学部）
- 昭和47年 7月 名古屋大学助教授（法学部）
- 昭和58年 7月 名古屋大学教授（法学部）
- 平成 8年 4月 名古屋大学法学部長（～ H10.3.31）
- 平成11年 4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
- 平成16年 4月 名古屋大学理事（人事・労務関係担当）・副総長（～ H18.3.31）



理事（教育・施設マネジメント関係担当）・副総長

若尾 祐司

（わかお ゆうじ）

昭和20年11月22日生

プロフィール

学 位：法学博士（名古屋大学）

専門分野：西洋史学

略歴

昭和47年10月 琉球大学講師（法文学部）
 昭和51年10月 琉球大学助教授（法文学部）
 昭和62年4月 琉球大学教授（法文学部）
 平成元年4月 名古屋大学助教授（文学部）
 平成4年7月 名古屋大学教授（文学部）
 平成11年11月 名古屋大学文学部長
 （～ H12.3.31）
 平成12年4月 名古屋大学教授（大学院文学研究科）
 名古屋大学大学院文学研究科長（～ H13.10.1）
 平成15年4月 名古屋大学教養教育院専任教官
 平成16年4月 名古屋大学理事（教育・施設マネジメント関係担当）・副総長（～ H18.3.31）
 名古屋大学教養教育院長（～ H18.3.31）



理事（研究・国際交流関係担当）・副総長、産学官連携推進本部長

山本 進一

（やまもと しんいち）

昭和27年7月22日生

プロフィール

学 位：農学博士（京都大学）

専門分野：森林生態学、森林保全学

略歴

昭和61年4月 岡山大学助手（農学部）
 昭和62年4月 岡山大学助教授（農学部）
 平成8年10月 名古屋大学教授（農学部）
 平成11年4月 名古屋大学教授（大学院生命農学研究科）
 平成14年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科長（～ H16.3.31）
 平成16年4月 名古屋大学理事（研究・国際交流関係担当）・副総長（～ H18.3.31）
 名古屋大学産学官連携推進本部長



理事（財務関係担当）・事務局長

渡橋 正博

（おりはし まさひろ）

昭和21年2月16日生

略歴

昭和39年4月 広島大学採用
 昭和45年6月 文部省官房人事課
 昭和61年9月 九州大学庶務部人事課長
 昭和62年9月 九州大学庶務部庶務課長
 平成元年2月 文部省生涯学習局青少年教育課課長補佐
 平成3年4月 文部省大臣官房人事課専門員
 平成4年7月 文部省大臣官房人事課総務班主査
 平成6年4月 文部省大臣官房人事課給与班主査
 平成8年4月 文部省大臣官房人事課任用班主査
 平成8年7月 文部省大臣官房人事課調査官
 平成12年4月 東京医科歯科大学事務局長
 平成15年4月 名古屋大学事務局長
 平成16年4月 名古屋大学理事（財務関係担当）（～ H18.3.31）



理事（法務関係担当、学外・非常勤）

林 光佑

（はやし こうすけ）

昭和17年2月1日生

略歴

昭和39年4月 名古屋大学助手（法学部）

昭和41年4月 司法修習生

昭和43年4月 弁護士登録

昭和58年4月 名古屋弁護士会副会長

（～ S59.3.31）

平成10年4月 日本弁護士連合会副会長

（～ H11.3.31）

名古屋弁護士会会長

（～ H11.3.31）

中部弁護士連合会理事長

（～ H11.3.31）

平成16年4月 名古屋大学理事（法務関係担当、非常勤）

（～ H18.3.31）



監事（学外）

木村 洋一

（きむら よういち）

昭和8年11月29日生

略歴

昭和32年3月 名古屋大学経済学部卒業

昭和32年4月 中部電力株式会社入社

昭和55年7月 中部電力株式会社経理部次長

昭和58年7月 中部電力株式会社関係事業室長

昭和63年7月 中部電力株式会社支配人監査役室長

平成元年6月 中部電力株式会社取締役津支店長兼立地環境推進本部付

平成3年6月 中部電力株式会社取締役燃料部長

平成5年6月 中部電力株式会社常務取締役企画室長

平成7年6月 中部テレコミュニケーション株式会社代表取締役社長

平成15年6月 中部テレコミュニケーション株式会社相談役

平成16年4月 名古屋大学監事

（～ H18.3.31）



監事（学外・非常勤）

湯本 秀之

（ゆもと ひでゆき）

昭和32年1月24日生

略歴

昭和54年3月 早稲田大学商学部卒業

昭和54年4月 湯本二三男税理士事務所

（現湯本三平税理士事務所）
手伝

昭和60年11月 監査法人等松青木会計事務所（現監査法人トーマツ）入所

昭和61年10月 監査法人等松青木会計事務所（現監査法人トーマツ）退社

平成元年10月 監査法人伊東会計事務所（現中央青山監査法人）入所

平成15年6月 中央青山監査法人社員就任

平成16年4月 名古屋大学監事

（～ H18.3.31）

新任部局長等の紹介



大学院法学研究科長
佐分 晴夫
(さぶり はるお)
昭和21年8月23日生

プロフィール

学 位：法学修士（名古屋大学）
専門分野：国際法学、国際経済法学

略歴

昭和50年4月 名古屋大学助手（法学部）
昭和53年4月 名古屋大学助教授（法学部）
昭和59年4月 金沢大学助教授（法学部）
昭和62年4月 金沢大学教授（法学部）
平成4年4月 名古屋大学教授（法学部）
平成11年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院法学研究科長（～ H18.3.31）



大学院工学研究科長
澤木 宣彦
(さわき のぶひこ)
昭和20年12月18日生

プロフィール

学 位：工学博士（名古屋大学）
専門分野：半導体工学

略歴

昭和48年4月 名古屋大学助手（工学部）
昭和52年12月 名古屋大学講師（工学部）
昭和57年4月 名古屋大学助教授（工学部）
平成元年10月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科長（～ H18.3.31）



大学院生命農学研究科長
松田 幹
(まつだ つかさ)
昭和30年11月2日生

プロフィール

学 位：農学博士（名古屋大学） 医学博士（名古屋大学）

専門分野：応用生物科学、食品科学

略歴

昭和56年6月 名古屋大学助手（農学部）
平成3年1月 名古屋大学助教授（農学部）
平成7年6月 名古屋大学教授（農学部）
平成11年4月 名古屋大学教授（大学院生命農学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科長（～ H18.3.31）



総合保健体育科学センター長
島岡 清
(しまおか きよし)
昭和22年2月23日生

プロフィール

学 位：教育学修士（東京大学）
専門分野：体力科学、健康運動指導論

略歴

昭和50年10月 名古屋大学助手（総合保健体育科学センター）
昭和53年10月 名古屋大学講師（総合保健体育科学センター）
昭和63年1月 名古屋大学助教授（総合保健体育科学センター）
平成6年6月 名古屋大学教授（総合保健体育科学センター）
平成16年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター長（～ H18.3.31）



大学院国際開発研究科長
中西 久枝
(なかにし ひさえ)
昭和33年4月12日生

プロフィール

学 位：歴史学博士（Ph.D.）（カリフォルニア大学）

専門分野：国際政治学、中東地域研究

略歴

昭和60年10月 米国カリフォルニア大学中東研究センター研究助手
昭和63年9月 光陵女子短期大学専任講師
平成2年4月 米国カリフォルニア大学歴史学部教育フェロー
平成7年4月 光陵女子短期大学助教授
平成11年4月 名古屋大学助教授（大学院国際開発研究科）
平成13年3月 名古屋大学教授（大学院国際開発研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科長（～ H18.3.31）



大学院国際言語文化研究科長
近藤 健二
(こんどう けんじ)
昭和18年4月8日生

プロフィール

学 位：文学修士（名古屋大学）

専門分野：言語類型論

略歴

昭和46年11月 九州大学講師（教養部）
昭和48年4月 九州大学助教授（教養部）
昭和54年4月 名古屋大学助教授（総合言語センター）
昭和63年5月 名古屋大学教授（総合言語センター）
平成3年4月 名古屋大学教授（言語文化部）
平成14年4月 名古屋大学言語文化部長（～ H15.3.31）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院国際言語文化研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院国際言語文化研究科長（～ H18.3.31）



大学院環境学研究科長
黒田 達朗
(くろだ たつあき)
昭和30年3月11日生

プロフィール

学 位：Ph.D. (ペンシルベニア大学)
専門分野：都市・地域経済学、理論経済学

略歴

昭和60年10月 京都大学助手 (経済研究所)
平成元年12月 豊橋技術科学大学講師 (工学部)
平成3年10月 名古屋大学助教授 (教養部)
平成5年10月 名古屋大学助教授 (情報文化学部)
平成10年4月 名古屋大学教授 (情報文化学部)
平成13年4月 名古屋大学教授 (大学院環境学研究科)
平成14年4月 名古屋大学総長補佐 (法人化・人事・労務)・新組織対応担当 (～ H16.3.31)
平成16年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長 (～ H18.3.31)



大学院情報科学研究科長
阿草 清滋
(あぐさ きよし)
昭和22年10月9日生

プロフィール

学 位：工学博士 (京都大学)
専門分野：ソフトウェア工学

略歴

昭和49年4月 京都大学助手 (工学部)
昭和57年4月 京都大学講師 (工学部)
昭和58年4月 京都大学助教授 (工学部)
平成元年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成10年4月 名古屋大学教授 (情報メディア教育センター)
平成12年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成14年4月 名古屋大学情報連携基盤センター長 (～ H16.3.31)
平成15年4月 名古屋大学教授 (大学院情報科学研究科)
平成16年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科長 (～ H18.3.31)



環境医学研究所長
児玉 逸雄
(こだま いつお)
昭和21年11月23日生

プロフィール

学 位：医学博士 (名古屋大学)
専門分野：循環器学、不整脈学

略歴

昭和47年4月 静岡済生会病院医師
昭和50年5月 名古屋大学環境医学研究所研究生
昭和53年1月 名古屋大学文部技官 (環境医学研究所)
昭和55年5月 名古屋大学助手 (環境医学研究所)
昭和60年11月 名古屋大学助教授 (環境医学研究所)
平成5年11月 名古屋大学教授 (環境医学研究所)
平成16年4月 名古屋大学環境医学研究所長 (～ H18.3.31)



エコトピア科学研究機構長
松井 恒雄
(まつい つねお)
昭和22年9月1日生

プロフィール

学 位：工学博士 (名古屋大学)
専門分野：エネルギー機能材料科学

略歴

昭和50年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和50年9月 米国ノースウェスタン大学材料科学センター研究員
昭和51年10月 米国アリゾナ州立大学固体科学センター研究員
昭和52年12月 株式会社日立製作所入社 (～ S55.3)
昭和55年4月 名古屋大学助手 (工学部)
平成3年3月 名古屋大学助教授 (工学部)
平成7年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成11年4月 名古屋大学核燃料管理施設長 (～ H13.3.31)
平成16年4月 名古屋大学エコトピア科学研究機構長 (～ H19.3.31)



エコトピア科学研究機構先端技術共同研究センター長
森 滋勝
(もり しげかつ)
昭和17年5月2日生

プロフィール

学 位：工学博士 (名古屋大学)
専門分野：気固系プロセス、石炭利用プロセス、廃棄物利用技術

略歴

昭和45年4月 名古屋大学助手 (工学部)
昭和46年12月 名古屋工業大学講師 (工学部附属材料開発研究施設)
昭和50年4月 名古屋工業大学助教授 (工学部附属材料開発研究施設)
昭和60年4月 名古屋工業大学助教授 (工学部)
平成5年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成13年11月 名古屋大学教授 (先端技術共同研究センター)
平成15年4月 名古屋大学先端技術共同研究センター長 (～ H16.3.31)
平成16年4月 名古屋大学エコトピア科学研究機構先端技術共同研究センター長 (～ H17.3.31)



エコトピア科学研究機構ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長
竹田 美和
(たけだ よしかず)
昭和23年1月21日生

プロフィール

学 位：工学博士 (京都大学)
専門分野：半導体材料学、半導体界面物性、半導体結晶成長

略歴

昭和52年4月 京都大学助手 (工学部)
昭和61年11月 京都大学講師 (工学部)
平成2年11月 京都大学助教授 (工学部)
平成3年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成14年4月 名古屋大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長 (～ H16.3.31)
平成16年4月 名古屋大学エコトピア科学研究機構ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長 (～ H18.3.31)



エコトピア科学研究機構情報
メディア教育センター長
山本 一良
(やまもと いちろう)
昭和23年7月2日生

プロフィール

学 位：工学博士（名古屋大学）
専門分野：核燃料リサイクル工学、同位体分離、
プロセス・システムシミュレーション

略歴

昭和48年4月 名古屋大学助手（工学部）
昭和63年5月 名古屋大学助教授（工学部）
平成7年4月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研
究科）
平成13年4月 名古屋大学核燃料管理施設長
（～ H17.3.31）
平成14年4月 名古屋大学総長補佐（教養教育
担当）（～ H17.3.31）
平成16年4月 名古屋大学エコトピア科学研究
機構情報メディア教育センター
長（～ H18.3.31）



情報連携基盤センター長
渡邊 豊英
(わたなべ とよひで)
昭和23年12月9日生

プロフィール

学 位：工学博士（京都大学）
専門分野：社会システム情報学

略歴

昭和50年8月 京都大学助手（大型計算機セン
ター）
昭和62年4月 名古屋大学助教授（工学部）
平成6年11月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研
究科）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院情報科
学研究科）
平成16年4月 名古屋大学情報連携基盤セン
ター長（～ H18.3.31）



医学部附属病院長
井口 昭久
(いぐち あきひさ)
昭和18年9月22日生

プロフィール

学 位：医学博士（名古屋大学）
専門分野：老年科学

略歴

昭和46年7月 名古屋大学医学部附属病院医員
（研修医）
昭和49年12月 名古屋大学医学部附属病院医員
昭和51年1月 愛知医科大学講師
昭和56年4月 名古屋大学助手（医学部附属病院）
平成2年9月 名古屋大学講師（医学部附属病院）
平成5年4月 名古屋大学教授（医学部）
名古屋大学医学部附属病院老年科長
名古屋大学教授（大学院医学研究科）
名古屋大学医学部附属病院副病
院長（～ H16.3.31）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院医学研究科）
平成12年11月 名古屋大学医学部附属病院副病
院長（～ H16.3.31）
平成14年4月 名古屋大学教授（大学院医学系研究科）
名古屋大学医学部附属病院副病
院長（～ H16.2.29）
平成14年6月 名古屋大学医学部附属病院予防
医療部長（～ H16.3.31）
平成15年7月 名古屋大学医学部附属病院地域
医療センター長（～ H16.3.31）
平成16年3月 名古屋大学医学部附属病院長事
務取扱（～ H16.3.31）
平成16年4月 名古屋大学医学部附属病院長
（～ H19.3.31）



遺伝子実験施設長
石浦 正寛
(いしうら まさひろ)
昭和24年2月10日生

プロフィール

学 位：理学博士（大阪大学）
専門分野：ゲノム学、ナノ生物学

略歴

昭和51年4月 大阪大学微生物病研究所谷口 豊
学生（～ S52.11.30）
昭和52年12月 大阪大学助手（微生物病研究所）
昭和54年4月 生物科学総合研究機構基礎生物
学研究所助手（細胞生物学研究
系）
昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構基礎生物
学研究所助手（細胞生物学研究
系）
平成7年4月 名古屋大学助教授（理学部）
平成8年4月 名古屋大学助教授（大学院理学
研究科）
平成11年9月 名古屋大学教授（遺伝子実験施
設）
平成16年4月 名古屋大学遺伝子実験施設長
（～ H18.3.31）



施設計画推進室長
谷口 元
(たにぐち げん)
昭和24年1月1日生

プロフィール

学 位：工学博士（名古屋大学）
専門分野：建築計画・都市計画

略歴

昭和49年4月 (株)I.N.A. 新建築研究所社員（研
究職）（～ S52.3.31）
昭和52年4月 大同工業大学助手（建設工学科）
昭和53年10月 名古屋大学助手（工学部）
平成元年5月 名古屋大学講師（工学部）
平成4年4月 椋山女学園大学教授（生活科学部）
平成7年5月 名古屋大学教授（工学部）
平成7年5月 名古屋大学工学部施設整備推進室長
平成8年4月 名古屋大学施設計画推進室長
（～ H16.3.31）
平成13年11月 名古屋大学総長補佐（キャン
パス・施設担当）（～ H16.3.31）
平成16年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（施設整備
担当）（～ H17.3.31）
平成16年4月 名古屋大学施設計画推進室長
（～ H18.3.31）



大学文書資料室長
加藤 錠治
(かとう しょうじ)
昭和22年2月6日生

プロフィール

学 位：教育学博士（名古屋大学）
専門分野：教育社会史、大学史

略歴

昭和51年4月 名古屋大学助手（教育学部）
昭和57年10月 兵庫県立神戸商科大学助教授
平成2年4月 兵庫県立神戸商科大学教授
平成5年10月 名古屋大学助教授（教育学部）
平成7年4月 名古屋大学教授（教育学部）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院教育発
達科学研究科）
平成12年4月 名古屋大学史資料室長
平成13年4月 名古屋大学大学史資料室長
平成16年4月 名古屋大学大学史資料室長
（～ H18.3.31）



評価情報分析室長
松下 裕秀
(まつした ゆうしゅう)
昭和29年11月17日生

プロフィール

学 位：工学博士（名古屋大学）
専門分野：高分子材料科学

略歴

昭和57年4月 名古屋大学助手（工学部）
昭和62年8月 名古屋大学講師（工学部）
平成6年1月 名古屋大学助教授（工学部）
平成6年7月 東京大学助教授（物性研究所附属中性子散乱研究施設）
平成11年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（目標・評価担当）（～ H17.3.31）
平成16年5月 名古屋大学評価情報分析室長



セクシュアル・ハラスメント相談所長
近藤 孝晴
(こんどう たかはる)
昭和22年3月25日生

プロフィール

学 位：医学博士（名古屋大学）
専門分野：消化器内科学

略歴

昭和48年4月 愛知県厚生農業協同組合連合会加茂病院医師
昭和52年8月 名古屋大学医学部附属病院医員
昭和54年11月 名古屋大学助手（総合保健体育科学センター）
昭和63年3月 名古屋大学講師（総合保健体育科学センター）
平成2年4月 名古屋大学助教授（総合保健体育科学センター）
平成6年6月 名古屋大学教授（総合保健体育科学センター）
平成16年4月 名古屋大学セクシュアル・ハラスメント相談所長（～ H18.3.31）



社会連携推進室長
戸田山和久
(とだやま かずひさ)
昭和33年10月18日生

プロフィール

学 位：文学修士（東京大学）
専門分野：哲学、論理学、科学技術史（含科学社会学・科学技術基礎論）

略歴

平成元年7月 名古屋大学講師（教養部）
平成5年10月 名古屋大学助教授（情報文化学部）
平成10年4月 名古屋大学助教授（高等教育研究センター）
平成12年4月 名古屋大学助教授（情報文化学部）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院情報科学研究科）
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（社会連携・社会貢献担当）（～ H17.3.31）
平成16年4月 名古屋大学社会連携推進室長



災害対策室長
鈴木 康弘
(すずき やすひろ)
昭和36年2月26日生

プロフィール

学 位：理学博士（東京大学）
専門分野：地理学

略歴

平成3年4月 名古屋大学助手（工学部）
平成5年4月 愛知県立大学専任講師（文学部）
平成7年4月 愛知県立大学助教授（文学部）
平成10年4月 愛知県立大学助教授（情報科学部）
平成16年3月 名古屋大学教授（大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター）
平成16年3月 名古屋大学災害対策室長



情報セキュリティ対策推進室長
坂部 俊樹
(さかべ としき)
昭和24年8月27日生

プロフィール

学 位：工学博士（名古屋大学）
専門分野：ソフトウェア基礎論

略歴

昭和52年4月 名古屋大学助手（工学部）
昭和60年4月 三重大学助教授（工学部）
昭和62年4月 名古屋大学助教授（工学部）
平成5年6月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院情報科学研究科）
平成15年9月 名古屋大学総長補佐（情報担当）（～ H16.3.31）
平成15年12月 名古屋大学情報セキュリティ対策推進室長
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（広報・情報担当）（～ H17.3.31）



留学生相談室長
松浦 まち子
(まつうら まちこ)
昭和24年1月26日生

プロフィール

学 位：文学士
専門分野：留学生教育

略歴

昭和46年3月 トヨタ自動車株式会社入社
平成2年2月 名古屋大学講師（経済学部）
留学生専門教育教官
平成5年4月 名古屋大学助教授（経済学部）
留学生相談主事
平成14年8月 名古屋大学助教授（留学生センター）
平成16年1月 名古屋大学留学生相談室長（～ H18.3.31）



法務室長
松浦 好治
(まつうら よしはる)
昭和23年9月16日生

プロフィール

学 位：法学修士（大阪大学）
専門分野：法情報論、法思想史

略歴

昭和51年4月 中京大学講師（法学部）
昭和54年4月 中京大学助教授（法学部）
昭和57年4月 大阪大学助教授（法学部）
平成3年1月 大阪大学教授（法学部）
平成11年4月 大阪大学教授（大学院法学研究科）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成14年4月 名古屋大学教授（法政国際教育協力研究センター）
平成14年4月 名古屋大学総長補佐（法人化（法務）担当）（～ H15.3.31）
平成15年4月 名古屋大学総長補佐（法人化（組織・運営）担当）（～ H16.3.31）
平成15年4月 名古屋大学訟務室長（～ H16.3.31）
平成16年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成16年4月 名古屋大学法務室長



施設管理部長
山口 博行
(やまぐち ひろゆき)
昭和23年11月16日生

略歴

昭和46年4月 文部省採用
平成2年4月 北海道大学設備課長
平成5年4月 東京工業大学設備課長
平成7年4月 文部省官房文教施設部技術課補佐
平成11年7月 文部省官房文教施設部指導課補佐
平成13年1月 文部科学省官房文教施設部施設企画課監理室補佐
平成13年10月 北海道大学施設部長
平成16年4月 名古屋大学施設管理部長



附属図書館事務部長
山下 洋一
(やました よういち)
昭和20年8月29日生

略歴

昭和39年3月 北海道大学採用
平成5年4月 図書館情報大学図書館情報課長
平成7年4月 東京学芸大学附属図書館情報サービス課長
平成9年4月 新潟大学附属図書館情報管理課長
平成11年4月 東京大学附属図書館情報管理課長
平成12年4月 東京大学附属図書館総務課長
平成14年4月 金沢大学附属図書館事務部長
平成16年4月 名古屋大学附属図書館事務部長



医学部・医学系研究科事務部次長
藤井 勉
(ふじい つとむ)
昭和21年12月5日生

略歴

昭和46年12月 岐阜大学採用
平成5年5月 鳥羽商船高等専門学校会計課長
平成8年1月 金沢大学医学部附属病院医事課長
平成11年4月 熊本大学医学部附属病院管理課長
平成13年7月 名古屋大学医学部総務課長
平成14年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科総務課長
平成16年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長

平成16年度

名古屋大学公開講座（全学企画）

総合テーマ『見る』 - 認知・認識への挑戦

あなたは今、競馬場にいるとしましょう。猛スピードで馬たちがゴールに向かって走っています。あなたには何が見えますか？

もしあなたが大金をつぎ込んで馬券を買っていたら、4番と6番のゼッケンしか目に入っていないかもしれせん。

もしあなたがカメラマンなら、ゴールの瞬間を待ってファインダー越しにゴールしか見ていないかもしれせん。

もしあなたがトンボなら、あなたの目にはその複眼によって、ものすごい数の馬が映っているのかもしれせん。そして馬たちを摩天楼のような巨大なものとして捉えていることでしょう。

もしあなたが神様なら、そこにいる何百人もの願いや、馬たちの運命や、トンボの一生、そういったことすべてを知りつくした目で、競馬場全体を見ていることでしょう。

同じ風景を同じように見ていると私たちは思いがちですが、実は皆それぞれ、別々の物を見ているのかもしれないのです。

「何を見るか」、それは各人の関心や興味に左右されます。ある人は巨大な宇宙しか見ていないかもしれせん。ある人は反対に、顕微鏡を使ってミクロの世界、肉眼では通常見えない世界を見て、人生の大半を過ごしているのかもしれせん。

「ものの見方」という言い方がありますが、客観的なものを主観的な目でもって区切るということは誰もが日常的に行なっていることです。そこには価値観ないしは個別の価値選択というものが介在しています。つまり「何が見えるか」、それは各人の人生経験や人生哲学により異なってくるのです。この差異については男女・世代・職業・地域・民族そして国家におけるものと、様々なレベルが設定されます。同じ対象・事象を前にして、その解釈が人により千差万別なもの、そのせいなのです。

本講座では、様々な「見る」という営みについて、人間の認知・認識との関わりという観点から考えてみます。そこから見えてくる新たな世界を垣間見てみませんか。

〔応募方法〕

- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|
| 1. 募集定員：200名（先着順） | 5. 申込期間：平成16年7月1日(木)～8月16日(月) |
| 2. 応募資格：満18才以上の方 | 6. 申込先：〒464-8601 名古屋市千種区不老町 |
| 3. 受講料：9,200円（消費税込み） | 名古屋大学社会連携課「公開講座」係 |
| 4. 申込方法：受講を希望する場合、平成16年度名古屋大学公開講座の受講案内に添付されている「納入依頼書」を最寄りの郵便局又はコンビニエンスストアでお支払いいただき、その領収書を別紙「公開講座申込書」の所定箇所にのり付けをし、下記申込先（名大）に書留郵便にて送付して下さい。 | TEL (052) 788 - 6144 |

平成16年度名古屋大学東山地区公開講座小テーマ

回	講義月日	小 テ ー マ	担当講師
1	8月24日(火)	遠近法の死角を見る	大学院国際言語文化研究科 教授 鈴木 繁夫
2	8月26日(木)	見る感覚の博物学 - 眼の歴史と視覚脳と美の観賞 -	大学院生命農学研究科 教授 宗宮 弘明
3	8月31日(火)	こころの奥を見る	総合保健体育科学センター 教授 小川 豊昭
4	9月2日(木)	女の立場、男の立場から、男女共同参画を見る	大学院教育発達科学研究科 教授 金井 篤子
5	9月7日(火)	詩人がダンサーを見る	大学院国際言語文化研究科 助教授 山口 庸子
6	9月9日(木)	スポーツ「観戦者」から「見る」社会	総合保健体育科学センター 講師 高橋 義雄
7	9月14日(火)	人工衛星搭載センサーから地球大気を見る	大学院環境学研究科 教授 神沢 博
8	9月16日(木)	宇宙を見る - 時間・空間・エネルギー -	エコトピア科学研究機構 教授 田原 譲
9	9月21日(火)	流れを見る - 流れの可視化 -	大学院工学研究科 教授 中村 佳朗
10	9月24日(金)	極微なものを見る - 顕微鏡の世界 -	大学院医学系研究科 助教授 白倉 治郎
11	9月30日(木)	人体の内部を見る	大学院医学系研究科 助教授 深津 博
12	10月5日(火)	戦争の傷跡を見る - アフガン難民の帰還と戦後復興 -	大学院国際開発研究科 教授 中西 久枝
13	10月7日(木)	会計の国際化を見る - 国際財務報告基準と日本の選択 -	大学院経済学研究科 助教授 野口 晃弘
14	10月12日(火)	事件の「真実」を見る	大学院法学研究科 助教授 大屋 雄裕
15	10月14日(木)	見ることと信じること - ゴシックのヴィジュアル・ワールド -	大学院文学研究科 教授 木俣 元一

(注) 講師の都合により、一部日程が変更されることがあります。

開設時間 午後6時00分～7時30分

開設場所 名古屋大学シンポジオン

修了証 10回以上出席の方に修了証書を授与します。

照会先 その他、この講座に関するご質問及びお問い合わせにつきましては、前記申込先まで、電話又は郵便(返信用封筒に切手貼付)によりお願いいたします。

名古屋大学ラジオ放送公開講座 名大リレーセミナー「高齢社会の設計」

超高齢社会や人口減少社会では人々の暮らし方や生き方だけではなく、政治・経済・教育などの社会の仕組みそのものも変化せざるをえません。

私たちはどのような暮らしを望み、そしてどのような社会の設計図を描いていくのでしょうか。それは21世紀の日本にとって最大の課題だと言っても過言ではありません。「名大リレーセミナー」では、この身近でかつ最も重要な課題について誰もが通る壮年から老年へのライフステージに沿いながら、それぞれの分野の研究者が最新の研究成果を交えながら分かりやすくお話ししていきます。

東海ラジオ放送（1332kHz） ・ 7月4日（日）～ 9月5日（日）
・ 毎週日曜日午前7時30分～8時

回	放送日時	小 テ ー マ	担当講師
1	7月4日（日）	「老い」と生命理論	大学院文学研究科 教授 山田 弘明
2	7月11日（日）	老年期を生き生きと過ごすための生活スタイルとは	大学院環境学研究科 教授 八田 武志
3	7月18日（日）	高齢化社会における労働市場	大学院経済学研究科 教授 太田 聡一
4	7月25日（日）	高齢者に必要な身体活動	総合保健体育科学センター 教授 島岡 清
5	8月1日（日）	高齢社会を支える法 - ノーマライゼーションの社会をめざして -	大学院法学研究科 教授 加藤 雅信
6	8月8日（日）	高齢化社会における生活支援ロボットの可能性	先端技術共同研究センター 教授 大日方 五郎
7	8月15日（日）	生命の循環とターミナルケア	医学部保健学科 教授 安藤 詳子
8	8月22日（日）	高齢社会における医療・介護	医学部附属病院 医員 鈴木 裕介
9	8月29日（日）	高齢者の終末期医療について	医学部附属病院 医員 益田 雄一郎
10	9月5日（日）	デス エデュケーション	大学院医学系研究科 客員研究者 茂木 七香

平成16年度


 名古屋大学公開講座（各学部等の企画）

主 催	講 座 名	開設期間	募集人数	申込期間	問い合わせ先
医学部医学科	動物からの感染する新しい病気	10/8	200	9/1～9/30	医学部学務課 052-744-2440
医学部保健学科	こころを癒すコミュニケーション	10/16・10/23	150	9/30～10/8	医学部学務課第二学務掛 052-719-1518
大学院国際開発研究科	大規模コーパスと英語研究 - 事実から理論へ、理論から事実へ -	7/31～8/3	26	7/5～7/9	大学院国際開発研究科・ 滝沢研究室 052-789-4197
大学院国際言語文化研究科	古典を読み直す	6/14～7/14	60	6/2～6/9	大学院国際言語文化研究 科事務室 052-789-5245
総合保健体育科学センター	健康開発のための基礎理論	7/10・7/11	30	5/6～6/25	総合保健体育科学セン ター事務室 052-789-3946
総合保健体育科学センター	親子で楽しむスポーツ教室	9/11～10/23	35	8/9～8/20	総合保健体育科学セン ター事務室 052-789-3946

 INFORMATION 

イベント等の開催予定一覧

イベント	日 時	概 要	連絡先
第7回博物館特別展	3月17日(水)~7月30日 (金)10時~16時	テーマ：名古屋大学の研究・教育を支えた 匠の技 場 所：博物館 休館日：月・火曜日 ただし祝休日は開館	博物館事務室 052 - 789 - 5767
平成16年度大学院国際言語文化研究科公開講座	6月14日(月)~7月14日 (水)18時30分~20時	テーマ：古典を読み直す 場 所：文系総合館7階カンファレンス ホール http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events.html	大学院国際言語文化 研究科事務室 052 - 789 - 5245
マイクロナノメカトロニクス の基盤技術・基礎研究 第3回シン ポジウム	7月7日(水)13時~16時 30分	場 所：工学部2号館南館4階241講義室 内 容：名古屋大学21世紀COEプログラ ム「情報社会を担うマイクロナノ メカトロニクス」の研究紹介 参加費：無料	マイクロナノCOE 事務局 Tel・Fax 052 - 788 - 6041
第3回名古屋大学防災アカデミー	7月13日(火)13時30分~ 15時	テーマ：科学の目で見る大震災の記録：関 東地震を例にして 場 所：環境総合館レクチャーホール 講演者：武村雅之鹿島建設小堀研究室部長 参加自由	災害対策室 052 - 788 - 6038
第7回博物館特別展開連講演会	7月22日(木)15時~16時 30分	テーマ：世界の広がりを測る-タレスからキャ ブテンクック、ハッブルまで- 場 所：博物館講義室 講演者：佐藤修二理学研究科教授	博物館事務室 052 - 789 - 5767
生物機能開発利用研究センター公 開実験講座2004	8月7日(土)~8月8日 (日)10時~16時	テーマ：バイオサイエンス・バイオテクノ ロジーを体験する 場 所：生物機能開発利用研究センター、 大学院生命農学研究科 対 象：社会人、学生(高校生以上) 申込締切：7月9日(金) http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/%7enubs/shakai.html	生物機能開発利用研 究センター・公開実 験講座2004係 052 - 789 - 5194
大学説明会	8月11日(水) 8月12日(木) 8月13日(金) 各日とも10時~16時	文科系学部 工学部以外の理科系学部 工学部 場 所：豊田講堂及び各学部等	学務部入試課 052 - 789 - 5765
第11回 MPS シンポジウム・複雑系 科学シンポジウム	10月26日(火)~10月27日 (水)	テーマ：複雑系の科学とその応用 場 所：シンポジオンホール、ベンチャー・ ビジネス・ラボラトリー http://w3.ipl.human.nagoya-u.ac.jp/mps2004/	北栄輔情報科学研究 科助教授 052 - 789 - 3521

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年4月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	国立大学法人きょう発足 学長アンケート 平野眞一総長意気込み「独創的な若手育成」	4 .1(木)	日刊工業 中日(朝刊)
2	独立法人等のメインバンク 本学はUFJ銀行と取引	4 .1(木)	日経(朝刊)
3	「産経適塾・春風講座」最終日は上田実・医学系研究科教授の講義	4 .1(木)	サンケイ
4	産業観光国際フォーラム実行委員会発足 委員長に奥野信宏・元副総長	4 .1(木)	日刊工業
5	国立大学法人名古屋大学 第1回役員会及び発足式 平野眞一総長「地域に貢献したい」	4 .1(木) 4 .2(金)	中日(夕刊) 他6社
6	平野眞一総長 愛・地球博の会場跡地に産学官による新たな研究機関の設置構想	4 .2(金)	毎日(朝刊)
7	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 キッズたちのあーと体験	4 .2(金)	朝日(夕刊)
8	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 世間は狭い	4 .3(土)	日経(夕刊)
9	天体物理学研究室 チリ・アンデス山中に電波望遠鏡 夏から観測	4 .3(土)	中日(夕刊)
10	「学生ITベンチャーアイデアグランプリ」大学院・大学の部で人間情報学研究科・入部百合絵さんのグループら3組に優秀賞	4 .3(土)	中日(朝刊)
11	第1回経営協議会開催 平野眞一総長「将来を担う知識人を育てる」	4 .4(日)	毎日(朝刊)
12	Weekly 教育：「経営協議会」プロの知恵で 平野眞一総長「経営者の立場からの意見を真摯に受け止めたい」	4 .4(日)	朝日(朝刊)
13	ひととき：大島伸一・元医学部附属病院長 国立大学病院の勝敗	4 .4(日)	中日(朝刊)
14	日本の先端研究 レベル向上したが科学論文、発進力に遅れ 理研理事長・野依良治・本学特任教授「常にアウェー、不利」	4 .4(日)	朝日(朝刊)
15	本学入学式 平野眞一総長「新しい時代を作り出す高い志を持ち続け、積極的に学んでほしい」	4 .5(月)	中日(夕刊) 他2社
16	本学留学生会 留学生支援に「春のバザー」	4 .6(火) 4 .14(水) 4 .16(金)	中日(朝刊) 毎日(朝刊) 朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
17	With：身近な野性の生態調査 動物管理学研究室ら	4 .6(火)	朝日(夕刊)
18	大学院先端研究308億円補助 本学は6位・約16億円	4 .7(水)	中日(朝刊)
19	環境学研究科「堀川とその周辺の環境～その将来像と実現方策を考える～」開講	4 .7(水)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
20	国立大学法人に国が現物で出資した財産の額判明 財務力に差 本学は8位・約2500億円	4 .8(木)	日経(朝刊)
21	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 死が無縁という錯覚	4 .8(木)	朝日(朝刊)
22	CDM名古屋モデル研究会 活動開始 本学の研究者ら34人「CDM運営機構」参加予定	4 .8(木)	中日(夕刊)
23	平野眞一総長 中日新聞社に就任挨拶「広報体制を強化し、社会貢献に努めたい」	4 .10(土)	中日(朝刊)
24	中日新聞主宰第12回愛知万博専門部会「世界の愛知」に脱皮をネットワーク広げよう 堀内守・本学名誉教授ら	4 .10(土)	中日(朝刊)
25	チンパンジーの胎児 学習能力証明 川合伸幸・情報科学研究科助教授ら	4 .11(日)	中日(朝刊)
26	名古屋大学博物館特別展 「名古屋大学の研究・教育を支えた匠の技」	4 .13(火)	中日(朝刊)
27	「名古屋リウマチネットワーク」結成 代表幹事に石黒直樹・医学系研究科教授ら	4 .13(火)	中日(朝刊)
28	名古屋大学COEオープンレクチャー 佐々木重洋・文学研究科助教授 「仮面の棲む森へ - アフリカ熱帯雨林の仮面文化」講演	4 .13(火) 4 .14(水)	中日(朝刊) 読売 朝日(夕刊)
29	活動通信：「ToBe 中日本」メンバーに本学の学生ら	4 .13(火)	中日(朝刊)
30	いつくるどうする大地震：鷲谷威・環境学研究科助教授	4 .13(火)	中日(夕刊)
31	5月29日～30日 医学部が各研究室を一般公開	4 .14(水)	朝日(朝刊)
32	高真空下でプラズマ成膜技術開発 水谷宇一郎・工学研究科教授らのグループ	4 .14(水)	日刊工業

	記 事	月 日	新聞等名
33	小柴昌俊・東大名誉教授 豊田講堂で講演会開催 本学 COE プログラム主催	4 .14(水) 4 .17(土) 4 .21(水) 4 .24(土)	読売 他 3 社
34	国立大学 企業の知恵を大学運営に「経営協議会」に経済人招へい 本学には丹羽宇一郎・伊藤忠商事社長「研究と経営、分離を」	4 .14(水)	日経(夕刊)
35	国立大学 非常勤職員の待遇改善へ 本学は育児・介護休業を一部拡大	4 .14(水)	朝日(夕刊)
36	愛知県立大学長・佐々木雄太・元本学副総長 中日新聞社へ就任挨拶	4 .16(金)	中日(朝刊)
37	中西久枝・国際開発研究科長「世界に通用する人材を育てたい」	4 .16(金)	朝日(夕刊)
38	ニッポン見聞録：コーチャル・リトゥ・本学大学院生「ほめる文化もっと広めて」	4 .16(金)	朝日(夕刊)
39	本学発 医療ベンチャー 再生分野へ応用期待 成瀬恵治・医学系研究科助教授ら	4 .17(土)	中日(朝刊)
40	サクライ賞 三田一郎・理学研究科教授ら受賞	4 .17(土) 4 .20(火)	毎日(朝刊) 他 2 社
41	「なごや環境大学」第一回総会 松尾稔・前総長が学長に就任	4 .17(土)	朝日(朝刊) 他 3 社
42	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 目覚まし時計いらす	4 .17(土)	日経(夕刊)
43	わが青春の母校：名古屋大学 国の期待担う学の殿堂	4 .18(日)	毎日(朝刊)
44	ひと：山田和生・本学名誉教授 第二句集「五彩」出版	4 .19(月)	中日(朝刊)
45	「第三回読売教育シンポジウム」開催 パネルディスカッションの司会に金井篤子・教育発達科学研究科教授	4 .20(火)	読売
46	愛知県立大前学長・森正男・元本学副総長 式辞などをまとめた「熊張学舎記一九九八・二〇〇四」を自費出版	4 .20(火)	中日(朝刊)
47	研究室発：長浜バイオ大バイオサイエンス学部教授・郷通子・本学名誉教授 遺伝子の構造や働きを分類整理	4 .20(火)	中日(朝刊)
48	名古屋大学数理ウェブ開催	4 .20(火)	中日(朝刊)
49	上田実・医学系研究科教授「再生医療の現状と実用化に向けた課題」	4 .21(水)	サンケイ
50	法政国際教育協力研究センター協議会 センター長に杉浦一孝・法学研究科教授を再任	4 .21(水)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
51	「モノづくり」テーマに産学連携 平野真一総長「大学も社会の一員。教育、研究は社会から与えられた責務だ」	4 .22(木)	日刊工業
52	研究支える技術職員削減 頭脳維持の瀬戸際 本学技術部「全学技術センター」に統合	4 .23(金)	読売
53	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 雪玉地球仮説	4 .24(土)	日経(夕刊)
54	河口信夫・情報連携基盤センター助教授ら ソフト研究成果の事業化 ベンチャー企業立ち上げ	4 .26(月)	日刊工業
55	本学解剖学の祖・奈良坂源一郎の伝記「完本 解剖学者奈良坂源一郎伝」刊行	4 .26(月)	朝日(朝刊)
56	杉谷健一郎・環境学研究科助教授らが結成した「名大川おやじ」 堀川へドロ本格分析へ	4 .26(月)	朝日(朝刊)
57	毎日新聞 日本医学教育学会主要メンバーへ質問 伴信太郎・医学系研究科教授「自由標ぼうやめるべき」「5～10年ごとに専門医資格を再認定」	4 .26(月)	毎日(朝刊)
58	時のおもり：池内了・理学研究科教授「環境教育」充実し回避を	4 .26(月)	中日(朝刊)
59	堀川：浄化に挑む 本学では環境学研究科に「堀川とその周辺地域の環境」の講座開設	4 .26(月)	朝日(夕刊)
60	ニュージーランドのカンタベリー、オークランド両大と共同で地球から一万七千光年離れた惑星確認 村木緩・太陽地球環境研究所教授ら	4 .27(火)	中日(朝刊)
61	愛知県 今年度も学生の地域づくりを支援 昨年度は本学の「絵本を通して国際交流」など10事業支援	4 .27(火)	朝日(朝刊)
62	東海の著名11人「連休こう過ごす」 平野真一総長は「自宅で原稿執筆にいそしむ」	4 .29(木)	読売
63	春の叙勲受賞者 瑞大：田中元治・元理学部長 瑞重：中重治・名誉教授 瑞中：福村晃夫・名誉教授 瑞双：元工学部事務部長	4 .29(木)	日刊工業 他 6 社
64	たんぱく質「1個」の変化の観察に成功 世界初 楠見明弘・理学研究科教授らのグループ	4 .30(金)	朝日(夕刊)
65	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 芸術と場所の力	4 .30(金)	朝日(夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年5月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	「JABEE」申請 理工系大・高専で増加 本学工学部の1コースなど	5 .1(土)	朝日(夕刊)
2	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 生態系食物連鎖	5 .1(土)	日経(夕刊)
3	部員減の本学応援団に女性団長就任 窮地に気合	5 .2(日)	中日(朝刊)
4	地震に備える「断層」 杉崎隆一・本学名誉教授ら「岐阜 - 一宮は活断層」	5 .3(月)	中日(朝刊)
5	第57回中日文化賞受賞 長浜バイオ大バイオサイエンス学部教授・郷通子・本学名誉教授	5 .3(月)	中日(朝刊)
6	名大サロン開設一周年記念冊子「われらかく飲みかく語りき名大サロンの一年」刊行	5 .4(火)	中日(朝刊)
7	名大サロンの主役：片木篤・環境学研究科教授 都市基盤と技術説く	5 .4(火)	中日(朝刊)
8	日本色彩学会第35回全国大会シンポジウム、本学で開催	5 .4(火)	毎日(朝刊)
9	活動通信：カレッジ・プレス 本学学生ら約15人 欲しい情報を自ら発信	5 .4(火)	中日(朝刊)
10	本学博物館「名古屋大学の研究・教育を支えた匠の技」展	5 .5(水)	朝日(朝刊)
11	訃報：紀本和男・本学名誉教授	5 .5(水)	中日(朝刊) 他3社
12	わが友わが母校：松坂屋社長岡田邦彦氏・本学経済学部の前身名古屋高等商業学校出身	5 .7(金)	日刊工業
13	三菱ふそう製ハブ破損 国交省報告のみ ミス見抜けず 武田邦彦・工学研究科教授「技術者にも権限を」	5 .7(金)	中日(朝刊)
14	医学部附属病院で「かの子会」演奏会	5 .7(金)	中日(朝刊)
15	地震など災害情報を8カ国語へ自動翻訳するシステム開発 本学情報連携基盤センターなど	5 .8(土) 5 .18(火)	中日(朝刊) 日刊工業
16	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 真の進歩指標 GPI	5 .8(土)	日経(夕刊)
17	第3回読売教育シンポジウム パネリストに金井篤子・教育発達科学研究科教授ら	5 .9(日)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
18	新しい仏像研究を求めて 宮治昭・文学研究科教授	5 .9(日)	中日(朝刊)
19	細胞の増殖などにかかわるたんぱく質分子 顕微鏡で初めて観察 楠見明弘・理学研究科教授ら	5 .10(月)	日刊工業
20	本学博物館特別講演会 20日開催「地質年代学の最前線を支える石工技術」 鈴木和博・年代測定総合研究センター教授	5 .11(火)	中日(朝刊)
21	本学 COE オープンレクチャー 13日開催 「中国古代青銅貨幣の生成」江村治樹・文学研究科教授	5 .11(火)	中日(朝刊)
22	池内了・理学研究科教授 大学評価学の樹立へ「学会」設立	5 .12(水)	朝日(夕刊)
23	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 しわは人生そのもの	5 .13(木)	朝日(朝刊)
24	サイエンス交流プラザで開館式 平野眞一総長ら約150人が出席	5 .13(木)	読売
25	中部電力 社外監査役に松尾稔・前総長を内定	5 .13(木)	中日(朝刊) 他3社
26	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 イエローストーン効果	5 .15(土)	日経(夕刊)
27	日本学術振興会・ストックホルム研究連絡センター長に藤田保健衛生大客員教授・岡崎恒子・本学名誉教授が就任	5 .18(火)	中日(朝刊)
28	数理ウエーブ 22日開催 佐藤肇・多元数理科学研究科教授、大沢健夫・同教授が話す	5 .18(火)	中日(朝刊)
29	「第45回名大祭」プレ企画 医学部が29日、30日に「医学部公開2004～医次元への招待～」開催	5 .19(水)	中日(朝刊)
30	攻める大学経営：本学は特許出願の迅速化図り、平野眞一総長「競争的に予算を取り合う形にする」	5 .19(水) 5 .20(木)	日経(朝刊)
31	本学学生ら経営する「カフェエスト」メニュー一新、再出発	5 .19(水)	読売
32	飛騨市「夢たまご塾・飛騨アカデミー」設立 プレセミナーに佐藤修二・理学研究科教授の講義	5 .19(水)	読売
33	骨粗しょう症に藻類効果 上村大輔・理学研究科教授、中部大らの研究グループ発見	5 .21(金)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
34	第5回高等研究院セミナー 25日開催 安成哲三・地球水循環研究センター教授、宇澤達・多元数理科学研究科教授講演	5 22(土)	読売
35	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 タフネス遺伝子	5 22(土)	日経(夕刊)
36	時のおもり：池内了・理学研究科教授 回帰直線	5 24(月)	中日(朝刊)
37	With:「七帝戦」4連覇に挑む本学相撲部 道場完成 復興の励みに	5 24(月)	朝日(夕刊)
38	「日本麻酔科学会第51回学術集会」開催を控えて 大会会長・島田康弘・本学医学系研究科教授に聞く	5 25(火)	中日(朝日)
39	学生街ダンス・名大合同合唱祭 歌声ぜひ聞いて	5 25(火)	中日(朝刊)
40	来月3日から名大祭 LEDなどの研究公開・留学生らの平和イベントなど	5 25(火) 5 26(水) 5 28(金)	中日(朝刊) 読売
41	本学博物館コンサート 27日	5 25(火)	中日(朝刊)
42	地下探査法「アクロス」で観測実験 熊沢峰夫・元本学教授、サイクル機構などと共同研究	5 26(水)	毎日(朝刊)
43	名古屋刑務所事件公判で二村雄次・医学系研究科教授 証言「放水で直腸に傷」疑問視	5 27(木)	読売 毎日(朝刊)
44	住民の笑顔輝く自治体めざして 全体会に市橋克哉・法学研究科教授「地方自治体・構造改革からみえてくるもの」	5 27(木)	朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
45	究極のエコ・ユビキタス実現へ 河口信夫・情報連携基盤センター助教授	5 28(金)	日刊工業
46	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 いつまでもアートフェチ	5 28(金)	朝日(夕刊)
47	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 ハッブル宇宙望遠鏡	5 29(土)	日経(夕刊)
48	移植普及に取り組む愛知腎臓財団 座談会 松尾清一・医学系研究科教授ら	5 29(土)	読売
49	卒後臨床研修制度シンポジウム 井口昭久医学部附属病院長ら講演	5 30(日)	読売
50	「勤労挺身隊訴訟」支援する会の集い 森英樹理事「忘れてはいけない過去と向き合って未来を語る」講演	5 30(日)	読売
51	生物時計の「振り子」たんぱく質を解明 理化学研究所と本学石浦正寛・遺伝子実験施設教授らのグループ	5 31(月)	中日 他2社
52	日本山岳会東海支部 只木良也本学名誉教授の指導のもと「環境林」を猿投山に	5 31(月)	中日(夕刊)
53	学生相談 大学も本腰に 本学では「ピア・サポート」制度	5 31(月)	朝日(夕刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部 総務広報課 広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ちょっと名大史

②6 「名大」マンホールカバー

梅雨の季節になって、傘を手放せない日が多くなりました。雨の日に傘をさして歩く時、つい足元に視線が向けられます。今回は、学内のマンホールカバーについて紹介します。

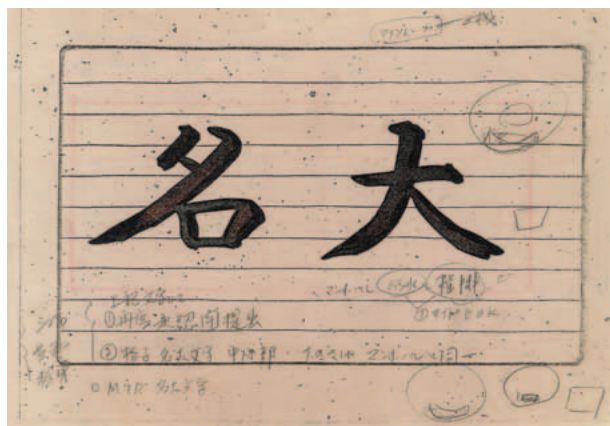
本学構内には数多くのマンホールがあります。それらのマンホールは、形状・大きさともに多種多様で、その設置場所も舗装された道路上のみならず、未舗装の地面や建物内など様々です。現在、その正確な数は明らかでないといわれています。

通常、マンホールカバーには「排水」「雨水」「電気」「通信」などマンホールの用途が鋳出されていますが、学内のマンホールの一部には用途名のほかに「名大」という文字の入ったカバーがあります。この「名大」文字入りマンホールカバーは、1970年代半ば頃に作成された特製品です。当時は、市町村や他大学においても名前入りやロゴ入りの特製カバーが作成されたとのことですが、鋳物が高価で取り引きされた時期であったため盗難防止策として考えられたようです。特製品の場合、1度に2～300個を作成しないとコストが割高になるため、その程度の数が発注されたものと思われます。

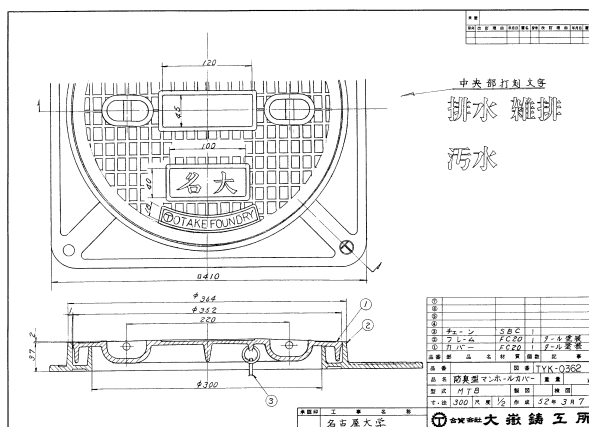
当室には、1977年3月に作成された「名大」文字入りカバーの仕様書（写）とともに、当時の施設部設備課長が揮毫した「名大」鋳出し文字原稿（写）が保管されています。なお、この「名大」文字入りカバーは1991年11月に作成以降、追加作成はされていないとのことです。



「名大」銘入りのマンホールカバー



「名大」鋳出し文字原稿（写）



1977年作成時の仕様書（写）

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。